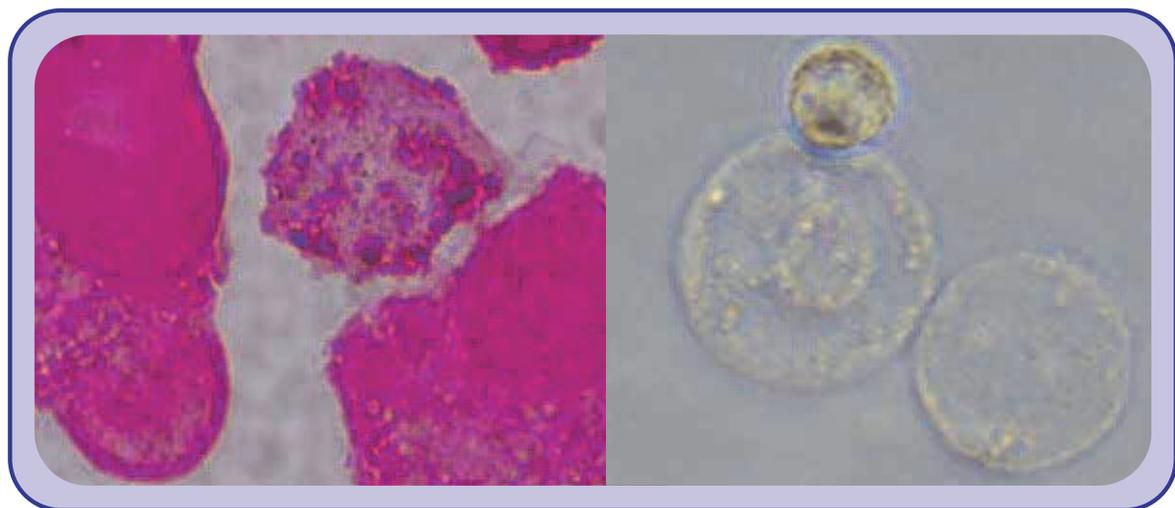


第22号

さくらしま

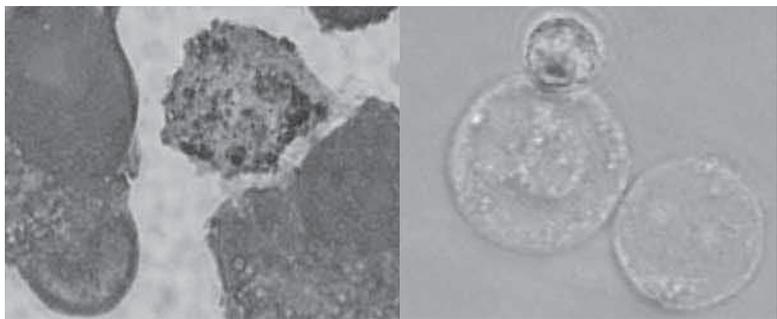
2008



鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

同門会誌

〔表紙写真の説明〕



咽頭上皮粘膜に付着する肺炎球菌。

細菌が感染症を引き起こすには、細菌はまず宿主細胞に接着し、定着し、組織内へと侵入していく。咽頭上皮細胞（D562）に、肺炎球菌が接着している様子を示す。

左：グラム染色 右：位相差顕微鏡像（川畠 雅樹）

目

次

巻頭言	1
会長の挨拶	3
Ⅰ. 黒野教授就任10周年特集	4
Ⅱ. 教室来訪者	15
Ⅲ. 教室行事	
1. 共催の講演会	16
2. 第10回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム	19
3. 「鼻の日」	21
4. 「耳の日ならびにアレルギー週間公開講座」	21
5. 2007年水曜セミナー	23
Ⅳ. 同門会報告	25
Ⅴ. 地域医療報告	
1. 巡回診療（県医務課）	28
2. 身体障害者巡回診療	28
3. 学校保健（統計報告）	28
Ⅵ. 特殊外来通信	
1. アレルギー外来	31
2. 副鼻腔炎外来	31
3. 頭頸部腫瘍外来：毎週木曜日（予約制）	32
4. 難聴・耳鳴り外来	33
Ⅶ. 病理集計	34
Ⅷ. 各省庁諸研究	35
Ⅸ. 業 績	
1. 原 著	36
2. 総 説	36

3. 国内学会発表	39
4. 国際学会発表	47
5. 学位論文要旨	48

X. 医局通信

1. 医局人事	51
2. 学会報告	
① 第19回日本アレルギー学会春季臨床大会	52
② 第2回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	52
③ 第22回九州連合地方部会学術講演会	53
④ 第19回頭蓋底外科学会	54
⑤ 第69回耳鼻咽喉科臨床学会・学術講演会	55
⑥ 第14回 マクロライド新作用研究会	55
⑦ 第20回日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会	56
⑧ 第46回日本鼻科学会総会・学術講演会	57
⑨ 第17回日本耳科学会総会・学術講演会	58
⑩ 第59回日本気管食道科学会総会	58
⑪ 第57回日本アレルギー学会秋季学術大会	59
⑫ 第26回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	60
⑬ 9 th International Symposium on Recent Advances in Otitis Media	61
3. 関連病院便り	
① 国立病院機構 鹿児島医療センター便り	62
② 鹿児島県立大島病院	62
③ 鹿児島市立病院便り	66
④ 藤元早鈴病院便り	67
⑤ 済生会川内病院便り	68
⑥ 鹿児島生協病院便り 第三報	69
⑦ 天辰病院便り	71

XI. 関連病院	72
----------	----

XII. 海外同門会名簿	76
--------------	----

XIII. 自治医大研修生	80
---------------	----

同門会会則	82
-------	----

編集後記	84
------	----

巻 頭 言

黒 野 祐 一

まず、今年1月19日の同門会総会において私の鹿児島大学就任10周年の記念式典を開催していただいたことに、同門会そして地方部会の諸先生に心より御礼申し上げます。大学や医療を取り巻く環境がめまぐるしく変化する中で、私がなんとかこれまで教室を運営できたのは、皆様の暖かいご支援によるものと、重ねて感謝申し上げる次第です。ありがとうございます。

本当に時の経つのは早いもので、教授就任当時の鹿児島大学医学部、そして全国の耳鼻咽喉科学講座において最も若い教授であった私も、いろいろな学会の理事を命じられる中堅どころの年代に入り、今年には日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会の理事長を拝命しました。こうした責任ある職務に私があるのは、教室員が臨床や研究において多くの業績を重ね、それが対外的に認められたことによるものであります。これまで苦勞を供にしてきた教室員にも感謝の言葉を伝えたいと思います。

しかし、こうした我々の努力や実績に反して、教室のマンパワーは衰退するばかりです。今年には卒後研修を終えた馬越先生が新たに入局してくれましたが、退局者のほうが多く、大島県立病院と鹿屋医療センターへの医師派遣ができなくなりました。また、今年秋には済生会川内病院の耳鼻咽喉科も休診となります。したがって、鹿児島県で耳鼻咽喉科の二次・三次医療ができるのは鹿児島市だけとなり、鹿児島市以外の診療所の先生には、多大なご不便とご苦勞をおかけすることになります。どうぞ大学の現状をご理解頂き、しばらくの間ご容赦下さるようお願い申し上げます。

そこで、今まさに直面し対応が迫られている問題のひとつが救急医療です。大学病院や関連施設に搬送できない患者をどうするか。是非ともそれぞれの地区の基幹病院とのネットワークを構築するなどの対策を早急に講じて頂きたいと思います。私も出来る限りの協力をさせていただきます。また、これまでは関連施設で対処していた頭頸部癌患者までもが大学に集中するようになり、ほとんどのベッドがこうした患者で占拠されつつあります。そのため、ベッドを流動的に使用することが難しく、いつでも急患を受け入れることができなくなってきました。したがって、いずれは市内の診療所においても診療時間の延長や救急診療担当医の増員、オープン化病院における当直の輪番制といった対応をお願いする事態が生じるかもしれません。

それ以外にも今後いろいろな弊害が生じることが予想されます。そのひとつが、耳鼻咽喉科医の育成です。頭頸部癌患者の治療で手一杯となり、若い先生が通常疾患の手術を学ぶ機会や施設がなくなってきました。このままではせつかくの少ないながらも優秀



な若い人材を無駄にしてしまうことになりかねません。そうしないためにも、早急にマンパワーを充足し、将来の鹿児島県における耳鼻咽喉科医療を担う人材を育てなくてはなりません。そのための方策を立てるのに何か妙案はないかと考え、昨年、座談会を企画しました。その内容を本誌に掲載していますので、是非ともご覧いただきたいと思います。

鹿児島に手術ができる耳鼻咽喉科医がいなくなる。大学病院で癌の治療が出来なくなる。決してジョークではありません。10年後にこれが現実の事態とならないために、私も教室員とともにさらに努力を重ねて参りますので、皆様のご理解と暖かいご支援をお願い申し上げます。

会長の挨拶

山 本 誠

平成20年8月が過ぎようとし、年齢と共に月日の経つ早さを実感していますが、同門会の先生方は大過なくお過ごしのことと思います。今年度は6月に小児耳鼻咽喉科学会が盛大に開催され、成功裏に終了しました。9月には口腔咽頭学会も準備万端となり、後は開催を待つのみと思われまふ。これらは一重に会員の方々の御協力の賜物です。ところで、昨年から危惧されていた県立大島病院県立鹿屋医療センターの耳鼻咽喉科が閉鎖状態となり、地方の耳鼻科医療が危うくなってきました。医会での意見交換会でも決定的な打開案は出ず、県の財政から考慮しても医師の給料増額は望むべくもなく、他からの耳鼻科医招聘はままならない所です。今後は私立病院との連携を模索しつつ、新入医局員をいかに増やしていくかだと思われまふ。さらに気掛りな事は10数年後に基幹病院で手術のできる医師を何人確保できるかです。医局員の減少に加え、若手が開業することにより、後継者が育ちにくくなっています。特に最近は、土・日曜日の夜間、深夜に大学病院では耳鼻科疾患の一次救急患者が増加し、医局員の疲労は蓄積し飽和状態になりつつあります。鹿児島市耳鼻科医会で打開策を話し合う予定ですが、地方の会員の方々の御協力もお願い申し上げます。後方に2次救急、3次救急を引き受けてもらえる病院があつてこそ、開業医は安心して医療を行なえると思ひます。臨床会や忘年会、ゴルフ大会などの医局の諸行事に御参加いただき、医局の先生方を激励していただければ幸いです。

最後に同門会々長に就任して2年目になりましたが、まだまだ医局におんぶにだっこの状態で、同門会総会だけの会長ですが、少しずつでも同門会としての活動を増やしていきたいと思ひております。医局と勤務の先生方、開業の先生方の橋渡しとして頑張りたいたいと思ひますので忌憚のないご意見をお聞かせください。

■黒野臨床開講10周年を祝して

大 山 勝

黒野臨床開講10周年、誠におめでとうございます。鹿児島大学に着任以来、新しい国立大学法人化の波に翻弄されながら大学院教育機関の発足、基礎造り、体制固めなどに幾多の困難を乗り越えて、今日まで奮闘、努心された上に、教室にあっては、若手研究者の養成と独創的で輝かしい立派な研究業績を重ねて来られたことに満腔の敬意と祝意を表します。ご苦労さまでした。

さて、人間には誰もがモットーや座右の銘といえる名言、格言を持ち合わせているものです。私の場合、三重大、米国留学時代から鹿児島大学時代そして奄美の医師会病院さらには現在の実地臨床の分野とそれぞれ組織や立場は変わっても、一貫して持ち続け、実践して来た生活信条に、“和と情熱”という言葉があります。

これは、仕事を遂行する上でのモットーでもあります。“和”という文字は、人々の精神構造や人間社会との係わり合いで大切な多くの意味を持ち合わせています。その主なものをあげますと、なごやかなこと、おだやかなこと、調和のとれていること、仲よくすること、互いに相手を大切に協力し合う関係にあること等々であります。一方、“情熱”という言葉は、文字通り、激しく燃えたつ感情とか物事に向かって気持ちが燃え立つことなどとなっています。

しかし、最近では、この和にしても情熱にしても、これまでの語意、概念に加えて、新たな解釈と共に理解、信奉しようと思うようになりました。その一つは、千利休の“和（あ）え物”談義での和の精神であります。すなわち、“和え物”は、各食材がそれぞれ勝手に味を出すのではなくて、和合して第3の味を出すものです。人の集まりも同じで、異なる個性をうまく和え合って、はじめて人の和が成立する.. というくぐりでありませう。和の意義と情緒を美事なまでに云い当て、判り易く表現していると思います。一方、情熱については、近年、洋の東西を問わず知識よりも知恵そして何よりも感情を重んじる気運が拡がりつつあることと関係します。わが国では、本来、日本人に特徴的とされて来た心の問題への回帰現象の一つとして“人情、心情、温情”すなわち“惻隱の情”を見直そうという兆しであります。兎もすれば、忘れかけられている人々の心の乾きに、これらの情を再び注ぎ込むことで人間の温もりを取り戻そうという試みでもあります。情熱の語意も、これら幾つかの情に熱意を示すという意味で、勝手に解釈、理解するこ

とも許されましょう。昨今の殺伐した世相には、とくに重要であり、人々の和を保つためにも大切な信条の一つとなります。“和と情熱”のモットー現代版として、昨今、自らに言い聞かせているところです。

黒野臨床10周年の節目にあたり、大学教育や教室運営をより充実、発展させる縁となれば大変嬉しく思います。教室の皆様、同門会の諸兄姉各位の増々のご健勝ご発展、ご多幸を心から祈念いたします。

■黒野教授就任10周年にさいして

山 本 誠

黒野先生は平成9年11月に鹿大耳鼻科に着任されました。最初は家探しから始まり、早や10年かと思うと、時の経つ早さをつくづく感じています。着任早々、医局員の開業が相次ぎ、新しい医局の体制づくりは大変だった事でしょう。その頃から耳鼻科の入局者の減少が始っており、教育、研究、人事とすべてにおいて、多大の苦労があった事と拝察されます。それにもかかわらず、この10年間の学位取得者は15名にのぼり、毎年多額の文部科学省科学研究費や厚生労働省科学研究費補助金をいただいております。本年度も2千万円以上の科研費を獲得され、鹿大学内はもとより、九大耳鼻科をしのぐ額だと承っており、その研究が高く評価されている事がうかがわれます。ただ新研修医制度、新人医師たちの考え方の変化により、全国でも耳鼻科入局者の大幅な減少をみており、鹿大も例外ではありません。県立北薩病院、出水市立病院に続き、県立大島病院、県立鹿屋医療センターへの出向も停止となり、地方における完結型の耳鼻科医療が困難になっています。さらに我々が大学にお世話になっている痛などに対する高度医療、重症の救急医療においても黄信号がともろうとしています。現在耳鼻科の救急医療、悪性疾患に対して、鹿大、鹿児島市立病院、鹿児島医療センター。今給黎病院などで完結医療が行われていますが、このままでは10年後には後継者がいなくなると危惧されます。どこでも、いつでも、誰でも良い医療が受けられるという日本の伝統的医療制度の崩壊の危機に際して、大学、病院、開業医が一致協力する必要があります。同門会としても地域医療をいかに守り、大学の入局者を増やす為に何ができるか、真剣に考え、取り組んでいかねばならない時です。それ故、医局にできる限りの協力を行う事が大事です。同門会の皆様の御協力を宜しくお願い申し上げます。

■黒野祐一教授就任10周年記念座談会 「鹿児島県における耳鼻咽喉科の将来を語る」



○黒野：先生方には、ご多忙のところをこの座談会にご出席いただきありがとうございます。昨年（平成19年）11月で私が鹿児島大学に赴任してちょうど10年になります。そこで、この10年間を振り返るとともに、今後の方向性を定める上で、鹿児島県における耳鼻咽喉科診療のリーダーである先生方のご助言を頂きたいと考え、「鹿児島県における耳鼻咽喉科診療の将来を語る」という本座談会を企画しました。鹿児島県耳鼻咽喉科医会会長の朝隈先生、鹿児島大学聴覚頭頸部疾患学同門会会長の山本先生、そして、鹿児島市立病院耳鼻咽喉科部長の花牟礼先生、よろしくお願い致します。

さて、この10年で教室は大きく変化しました。スタッフの交代もありましたが、臨床そして基礎研究のテーマや方法が変わり、とくに若い医局員は大変苦勞したと思います。しかし、彼らの弛まぬ努力のおかげで、着々と成果が現れてきました。例えば、鼻科学会や口腔咽頭科学会などで、教室の若い先生がシンポジストに指名されていますし、論文数はまだ少ないものの、レベルの高い英文雑誌に掲載されるようになってきました。今後もこのモチベーションを維持し、さらなる飛躍をして欲しいと期待しているところです。

朝隈先生，医会ではどのような変化があったでしょうか。

○朝隈：医会では，診療レベルの向上，保険診療に関する問題への対応，会員相互の親睦を3つの柱にして運営にあたっています。特に学術担当の先生方が大変有意義な臨床懇話会を企画して下さっております。会員数の増加が顕著ですが，医会は，順調に運営されております。それから，この機会に黒野先生に礼を申し上げたいのですが，大学が行っている新しい研究や臨床について，学術講演会などで教えていただき大変勉強させていただいております。また，若い先生が非常に頑張っていることも頼もしく思います。先生のご指導に感謝しております。

○黒野：恐縮です。では，山本先生，同門会会長に就任されてまだ日は浅いですが，同門会としてはいかがでしょうか。

○山本：同門会はこれまで鹿児島大学の卒業である黒野先生に会長を務めていただき，非常にまとまった会として運営されてきたと思います。同門会という組織の役割と今後のあり方を再考して，このたび私が会長に指名された訳ですが，教室の発展のために同門会が何をすべきかを皆で議論し，少しずつ着実にやっっていこうと思っています。今，教室の一番の問題はマンパワーが不足していることだと思いますが，僕たちが入局したころの状況と同じかもしれません。しかし，医療や大学を取り巻く環境は大きく変化しており，教室の先生達の苦労や大変さはよく理解できます。したがって，教室の発展のためには協力を惜しまないつもりでいます。

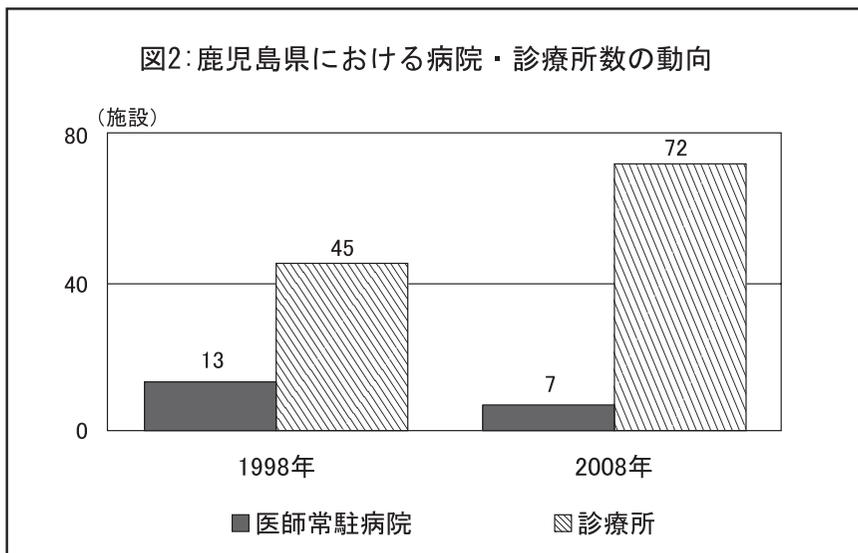
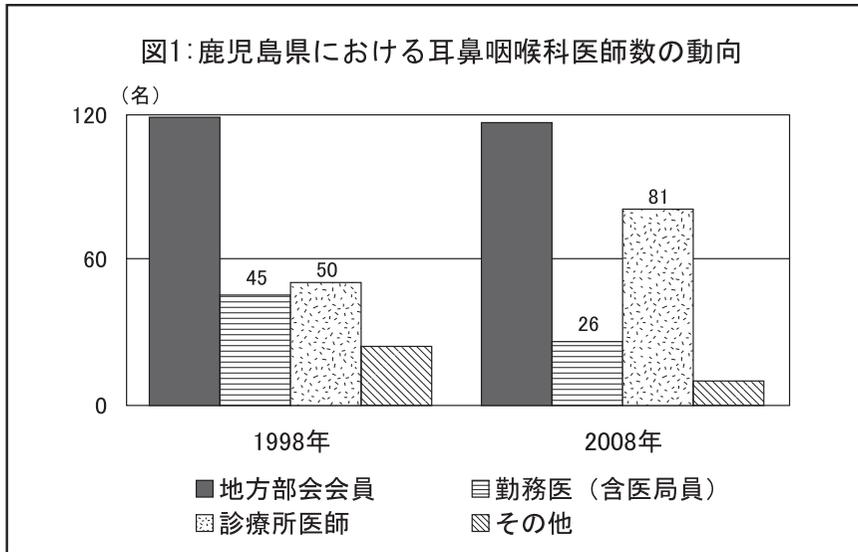


黒野先生

○黒野：ありがとうございます。花牟礼先生，先生も市立病院に就職されてちょうど10年になりますが，いかがでしょうか。

○花牟礼：大学から若い先生を派遣していただいているおかげもあって，この10年の間に手術症例も増えてきました。また，最近，疾患の中身がかなり変化してきているように思います。昔はたとえば扁桃摘は年間150例ぐらいありましたが，最近は年間50例ぐらいです。その一方で，マンパワーを必要とするがんの手術件数が年々増加しています。今後これにどのように対応していくか，真剣に考えないといけない時にきていると思います。

○黒野：この10年に何らかの進歩と発展があったことをお聞きし，安心しました。しかし，同時にマンパワーの不足，これが今一番の問題点であり，今後これがどのような影響を及ぼすかを考えると大きな不安を感じます。大学の医師不足は耳鼻咽喉科に限った



問題ではなく、その原因は医学教育制度の改革、特に卒後初期研修の必須化にあると思われまます。このプログラムに耳鼻咽喉科は必須ではなく選択科目であるため、研修医と接触する機会がありません。さらには、鹿児島大学病院は救急部がないこともあって、研修希望者が少なく、昨年の大学とその関連施設での初期研修医はわずか26名でした。このような状況のなかで、どうしたら耳鼻咽喉科医を確保できるのか、大きな悩みです。

そこで、鹿児島県においてどのくらい耳鼻咽喉科勤務医が減少してきたかという実状をお示し、それについて先生方にご意見を伺いたいと思います。お手元の資料をご覧ください。(図1) 鹿児島県の耳鼻咽喉科医師数はほとんど変化ありません。すなわち、こ

の10年間に医業を辞めた医師の補充はできているということです。しかし、勤務医数は半減していることが分かると思います。さらには、耳鼻咽喉科常勤医がいる病院数も半減しています。(図2) その一方で、耳鼻咽喉科診療所の医師数は倍増しています。要するに、勤務医の減少は開業医の増加によるものだということになります。誤解の無いように願いたいのですが、決して開業することを非難しているのではなく、このことが今後どのような問題を招くかということ进行予想し、その対策を考えていただきたいのです。例えば、大学では臨床に追われて研究など到底できなくなり、大学の役割が果たせなくなります。

○朝隈：話は聞いておりましたけれども、これほどひどいとは驚きました。地域医療というのは開業医とそれから勤務医のいるしっかりした大きな病院、手術のできる病院、そして大学、その3つがうまく機能しあって初めて完成できるものと思っています。ですから、大学病院それから勤務医のいる病院のマンパワーが落ちたということは、私も開業医にとっても大きな問題で、患者をどこにも送れないという状況がもう目前に迫っているという感じがします。これはもう黙って見ているわけにはいきませんね。開業医に何ができるかということ进行みんなで考える必要があると思います。



山本先生

○山本：僕を含めて鹿児島市内の開業医は、大学病院や市立病院があるため、まだそういうことを感じていないと思います。しかし、鹿屋、北薩、出水の開業医の先生方は患者を送る病院が無くて苦勞されているという話を耳にします。

○黒野：この地区の開業医の先生そして患者さんには大変申し訳なく思っているところですが、医局員はさらに少なくなってきたことから、2008年には他のいくつかの関連施設へも常勤医を派遣できなくなります。また、それに伴って離島診療や検診も出来なくなるため、医会の協力をお願いすることになると思います。

花牟礼先生、市立病院では医師数が維持できているので、それほど深刻な問題は生じていないかと思いますが、いかがでしょうか。

○花牟礼：おかげさまで鹿児島大学と宮崎大学からそれぞれ1人ずつ派遣していただき、現在でも4名の常勤医が確保できているのは幸せなことだと思っています。しかしながら、私と笠野先生は卒後25年以上の医師経験がありますが、他の2人とは約20年のギャップがあり、癌の手術はほとんど私が1人でやっているような状況で、中堅の術者がいないことの大変さを切実に感じているところです。

○黒野：大学も大して変わらないか、むしろ大学のほうが大変かしれません。頭頸部癌の手術は私がやはり20年以上の年齢差のある教室員とで行っていますし、鹿児島大学病院には市立病院のように形成外科医がいないため、再建手術も我々がやらなければなりません。ちなみに、4月から西元先生が医療センターに出向しますので、再建手術ができるのは私一人になります。しかし、幸い再建術に興味をもつ若い教室員が数名いるので、彼らに早くマスターしてもらいたいと願っているところです。

大学などとは逆に、医師数が増えた医会では何か変化はあったでしょうか。たとえば、レセプトの数や診療報酬の面で問題が生じたことはないでしょうか。

○山本：診療報酬は鹿児島だけの問題ではないので、医会でどうこうするということにはならないと思います。しかし、医会の会員数が増えたことから非常に活気がありますし、今後いろいろな活動が行えるのではないかと期待されます。

○黒野：大学や市立病院のマンパワーがまさに医会へシフトしたということですね。

○山本：ですから、先ほど申し上げたように、勤務医不足の現状に対して開業医に何かできるか、何を為すべきか、ということを具体的にみんなで考えねばならないと思います。

○黒野：私自身がそうですから、恐らく今開業されている先生も、まさかこういう状況になるということを全く予想していなかったと思います。そこで、大学病院のマンパワーが不足することで実地診療そして開業医の先生にどのような影響が生じるかということを考えてみたいと思います。例えば、急患への対応ができなくなることが懸念されます。大学病院の診療だけで手一杯となり、年中無休、24時間体制で急患を受け入れることは、スタッフの健康状態を考えると到底できないし、これを強いることは勤務医の離職をさらに促すことになりかねません。また、教室員が減少したことで稼動しうる病床数も少なくなり、これも急患を受け入れることが難しい要因になると思われます。

さらに、最近は大学病院をいわゆるコンビニ感覚でとらえている患者さんが鹿児島でも増加しているようで、深夜や早朝に多いときには8件ぐらい急性中耳炎の診察依頼の電話が直接当直医にかかってきます。これも問題です。

○山本：先日、救急センターの会議で、小児科から40日間の深夜帯に26件の急性中耳炎患者の受診があったことから、これを耳鼻科で診てもらうことはできないかとの要請がありました。しかし、1日に1人あるかないかの診療のために耳鼻科医が待機するのは無駄だと申し上げました。しかし、大学がそういう状況であれば、前向きに考える必要がありそうです。

○黒野：夜間や休日の救急当番医、時には平日でも診療終了の間際に診療所を受診した患者さんが、ほとんど診察を受けることなく大学へ行くように指示され、何の連絡もなく受診することがあります。これについても医会でぜひ話し合っていたいただきたいと思います。

ます。

○山本：確かに、大学の負担を軽減するためにもしっかり考えないといけないと思います。

○黒野：今後、開業医に夜間診療を促すような政策がなされようとしていますが、実際に可能でしょうか。

○山本：僕は7時ぐらいまで診療していますが、必要があればそれを9時ぐらいまで延長することはできると思います。

○朝隈：救急部の小児科の調査で、実際に受診してくる急患のうちの6割は本当の急患ではないことが報告されています。ご両親が共働きのため日中の時間帯に受診できないなどの事情もあるのかもしれませんが、ほんの一握りであるという実態をいかに市民に啓蒙するかということもありますね。それから、それぞれの医者がばらばらに、自分は9時までやります、11時までやりますよといっても、なかなか問題は解決しないと思います。その後の診療は、だれが責任を持つのかということになりますからね。したがって、急患センターの深夜帯の診療体制を整える必要があると思います。



朝隈先生

オンコールではなくて、深夜帯も誰かが常在するようなシステムができないと、なかなか抜本的な解決にはならないでしょうね。しかし、耳鼻咽喉科医会の先生方かなりの負担が強いられることになるでしょうし、現在そのために小児科医療が破綻しかかっているわけですから、嚴重なシミュレーションが必要と思います。

○黒野：鹿児島市あるいはこの近辺であればいざとなれば大学病院へ送っていただくことが可能ですが、遠方あるいは離島の地域医療に従事されている診療所の先生にはもっと重大かつ切実な問題になってくると予想されます。基幹病院に常勤する耳鼻咽喉科医がいなくなったことで、たとえば急性喉頭蓋炎で気管切開が必要と判断したときに、これからは診療所の先生が自ら執刀しなければならない状況がすでに生じています。手術を長く離れた先生に、しかも設備が十分でない診療所で果たして可能か、大いに心配です。

そこで、私が考えているのが、基幹病院のオープン化です。たしかに大きなハードルがあると思いますが、外科的治療や他科の応援が必要な患者さんを近くの基幹病院へ送って診療所の先生が処置できるようなシステムを構築できれば、常勤医はいなくても耳鼻咽喉科の救急医療を実践することは可能であり、大学としてもそこに非常勤の医師を派

遣すれば関連病院として維持できると思います。

○山本：それについてはすでに若い先生たちと話をしたことがあります。そういう体制が整えば、それに協力する開業医はいるし、増えてくると思います。

○朝隈：関連病院をオープン化して、その開業医がそこで手術をするというのは、救急がどうこう言う問題ではなく、手術をそれぞれの地域で開業医がやってくれということですか。

○黒野：そこまでできれば素晴らしいことですが、すぐさま実践するのはかなり難しいと思います。通常疾患の手術でも、最近のごく些細なことで医療訴訟が起きているし、手術をやるにはそれなりのリスクを負うことになります。また、病院のスタッフへの指示や緊急時の対応もマニュアル化する必要があります。手術をされる開業医の先生には、これらのことを十分納得していただかねばなりません。しかし、耳鼻咽喉科の救急医療に関してはすぐそこにある、いやすでに起こっている深刻な問題であり、早急な対策が必要と考えています。

○朝隈：それについては、私も前向きに考えるべき問題だと思います。大隅、北薩、鹿屋などそれぞれの地区で1カ所、そうした病院が必要でしょうね。

○黒野：関連病院が少なくなることで、地域医療への影響に加えて、もうひとつ私が懸念するのが、今後、鹿児島県の耳鼻咽喉科医療を担う後継者の教育・育成の問題です。

関連病院はこれまで地域医療へ貢献するとともに、教室の若い先生の教育とくに通常疾患の手術を指導するという重要な役割を果たしてきました。したがって、こうした施設が減少することで、若い先生が手術を学ぶ機会が少なくなります。私が若いころは、一日に一人で扁桃を2-3件行い、さらに副鼻腔炎や中耳炎あるいは頭頸部腫瘍の手術をするというまさに手術に明け暮れる毎日で、その中で技術を磨いてきました。しかし、最近では、当時のように数多くの手術を経験できる医師は非常に少ないと思います。手術は必ずしも数をこなせば上達するものではありませんが、それでもある程度の経験は必要です。したがって、とくに癌患者が集中する大学病院で通常疾患の手術に習熟することは非常に難しいと思われます。今後どのようにして教室員に手術を指導し、私よりもっと上手な外科医に育てるか、これも大きな課題です。

○花牟礼：今までも十分育てられなかったのに、今からどうしたら後継者を育てられるかといっても分かりませんが、それと同時に、どのようにして耳鼻咽喉科医を増やすかも考えなければなりません。今



花牟礼先生

年8月から大学の5年生の学生さんが私どもの病院にポリクリの一環として来てもらえるようになって、学生さんと話をする機会が生まれました。これまでこのような機会がなかったので、どうして耳鼻咽喉科に興味を持ってもらえないのだろうかと思議に思っていたのですが、学生さんと話をしてみると、全く興味がないわけではないように感じます。大学はどうしても頭頸部癌が中心で、耳鼻咽喉科のごく限られた領域しか見ていないのではないかと思います。市立病院も頭頸部癌患者が多いのですが、通常疾患もそれなりに見ることができます。これまでそういうチャンスがなかったのが残念な気がしています。

○黒野：今年の後期から、市立病院、鹿児島医療センター、そして今給黎病院に毎週火曜日と水曜日にポリクリ学生の教育を手伝っていただいています。学生にも好評で、耳鼻咽喉科診療をこれまでとは違った角度で、またより広い視野でとらえるようになった印象があります。

○朝隈：東北大学では開業医のところにも学生を行かせていると聞きましたが、これの非常に良いアイデアと思います。機会があれば、ぜひ私の診療所も見学に来させてください。開業医の医療がいかに面白いかを教たいものです。

○黒野：確かに耳鼻咽喉科に興味を持ってもらう動機付けにはなるかもしれませんが、しかし、今後この鹿児島に必要なのは、診療所ではなく、大学や市立病院、県立病院で働く勤務医であり、内科的治療よりも外科的治療、さらには頭頸部癌の治療ができる医師であることをよく理解していただきたいと思います。もちろん、当初は手術に興味が無くてもそのうちに好きになることは大いにありうるので、門戸を広くすることは必要と思います。

○山本：毎月開催している耳鼻咽喉科臨床懇話会に学生も参加していますよね。その席で、僕らがもっと積極的に彼らを勧誘してはどうですか。

○黒野：是非、よろしく願います。しかし、大学や関連病院に勤務している医師に開業を促すようなことはなるべく避けていただくよう、お願い致します。

ところで、先ほど花牟礼先生が、今までも育成できていないと言われましたが、私はそうは思いません。この10年間に、もちろん花牟礼先生をはじめ関連施設の部長の指導のおかげで、鼻や耳、そして頭頸部腫瘍の手術もできるようになった者は結構います。しかし、自分が手術を覚えたところで、後輩の指導をすることなく早くに開業していくので、関連施設が維持できなくなり、後継者もなかなか育たないという状況に陥りつつあるのです。

それでも、通常疾患や良性腫瘍の手術は比較的早くに習得できるので、あまり問題ありませんが、問題は頭頸部癌診療です。今はまだ私や花牟礼先生そして松崎先生が元気で頑張っているのですが、我々が現役を退くときのことを考えると大きな

不安が過ぎります。というのは、他大学や癌治療専門病院をみるとほとんどの施設に形成外科があり、鹿児島大学や鹿児島医療センターのように耳鼻咽喉科医が再建術を行っているところは稀です。したがって、鹿児島で頭頸部癌治療に従事するには、癌切除に加えて形成外科の技術も習得しなければならないし、長時間の手術に耐えうる強靱な体力と気力が必要です。また、習熟するまでには長い年数を要し、高いモチベーションを維持するのも至難の業といえます。大学でのこのような頭頸部癌治療の現実を目の当たりにすると大抵の学生は引いてしまいます。これも当教室への入局がすくない要因の一つになっているかもしれません。しかし、このまま教室員が増えずに、頭頸部癌治療ができる医師を育てることができなかつたら、あと10数年後には、鹿児島の頭頸部癌患者は他県へ紹介しなければならなくなります。

「今そこにある危機」として、「救急医療」について、そして、「まだ見えぬ危機」として「頭頸部癌治療」について、まだまだほかにもあるかと思いますが、今後、地方部会そして同門会の先生のお知恵とご支援をいただきながら、ともに考えて生きたいと思っております。

○朝隈：大学の現状や鹿児島県における耳鼻咽喉科診療の問題点がよく理解できました。今後もこのような情報を逐次知らせていただきたいと思えます。

○山本：鹿児島市内にいるためか、あまり実感できないのですが、大きな問題であり、僕らももっと真剣に考えなければならないことだと理解できました。黒野先生そして花牟礼先生には、健康に留意してこれからも頑張ってください。

○黒野、花牟礼：ありがとうございます。

○黒野：「鹿児島県における耳鼻咽喉科の将来を語る」というテーマで、明るい将来を語り合いたいと望んだ座談会ですが、なんとなく暗い話になり、また、私の発言ばかりで大変申し訳ありません。次回は、例えば「夢を語る」というようなテーマで楽しい座談会を企画したいと思いますので、よろしくお願い致します。

本日は誠にありがとうございました。

平成19年12月20日（木） 城山観光ホテルにて収録

Ⅱ. 教室来訪者

(平成19年4月～平成20年3月)

7月 熊本大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 湯本英二

7月 九州大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 小宗静男

7月 島根大学医学部耳鼻咽喉科教授 川内秀之

1. 共催の講演会

1. 第46回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年4月19日）

特別講演：「スギ花粉症—IgE 産生機構の問題—」

竹中 洋 先生

（大阪医科大学 耳鼻咽喉科学教室 教授）

一般演題：「扁平上皮癌（SCC）との鑑別に苦慮した喉頭原発 Basaloid

Squamous Cell Carcinoma の1例」

牧瀬 高穂 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「アレルギー性鼻炎モデルにおける経鼻ホスホリルコリン(PC)

投与はIgE 応答を抑制する」

宮下 圭一 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. 第47回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年5月10日）

特別講演：「内視鏡検査による嚥下障害の診断と外科治療の役割」

兵頭 政光 先生（愛媛大学大学院医学系研究科 頭頸部・

感覚器外科学 助教授）

一般演題：「眼窩蜂窩織炎に対する外科的治療の検討」

早水 佳子 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「外耳道腫瘍の手術適応と再建の方法について」

相良 ゆかり 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

3. 第32回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに学術集会（平成19年6月16日）（鹿児島）

特別講演：「内耳疾患における画像診断」

中島 務 先生

（名古屋大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学 教授）

一般演題：「甲状腺腫瘍が疑われた胸腺嚢胞の一例」

谷本 洋一郎 先生（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

「眼窩骨膜下腫瘍の1症例」

吉福 孝介 先生（県立大島病院 耳鼻咽喉科）

「急性喉頭蓋炎におけるリスクマネージメント」

福岩 達哉 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「頸部外切開を必要とした食道異物の一例」

平瀬 博之 先生（鹿屋医療センター）

4. 第48回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年7月19日）

特別講演：「小児急性中耳炎の治療戦略—したたかな細菌にどう対処するか—」

山中 昇 先生（和歌山県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

一般演題：「耳疾患に対するブロー液の治療成績」

永野 広海 先生（県立大島病院 耳鼻咽喉科）

「小児扁桃周囲膿瘍について過去5年間の検討」

早水 佳子 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

5. 第49回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年8月23日）

特別講演：「側頭骨病変の画像診断」

西崎 和則 先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授）

一般演題：「小児気管支異物の検討」

宮下 圭一 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「adenoid 切除術における XPS ドリルの有効性」

相良 ゆかり 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

6. 第50回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年9月13日）

特別講演：「めまいの治療 ～難治症例への対応を中心に～」

渡辺 行雄 先生

（富山大学大学院耳鼻咽喉科頭頸部外科学講座 教授）

一般演題：「早期診断治療により改善したベーチェット病」の一症例」

吉福 孝介 先生（県立大島病院 耳鼻咽喉科）

「滲出性中耳炎として加療されていた上咽頭腺様嚢胞癌の一例」

林 多聞 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

7. 第51回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成19年10月11日）

特別講演：「頭頸部癌に対する最近の話題」

甲能 直幸 先生（杏林大学医学部耳鼻咽喉科学 教授）

一般演題：「菊池病と鑑別を要する頸部リンパ節病変」

谷本 洋一郎 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「内視鏡下前頭洞手術 DrafⅡ及びⅢについて

－ビデオプレゼンテーションを中心に－

松根 彰志 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「耳下腺腫瘍 Low-grade cribriform cystadenocarcinoma の一例」

花牟礼 豊 先生（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

8. 第9回上気道アレルギー疾患を考える会（平成19年11月15日）

特別講演：「花粉症研究 最近の話題—OH10 Chamber の開発と最近の成果—」

橋口 一弘 先生（北里研究所病院 耳鼻咽喉科部長）

～実地診療において、抗ヒスタミン薬をいかに選択するか～

「第2世代抗ヒスタミン薬 使用実態調査からみた薬剤の選択基準」

宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

内菌 明裕 先生（せんだい耳鼻咽喉科 院長）

上野 員義 先生（うへの耳鼻咽喉科クリニック 院長）

9. 第13回南九州上気道感染症臨床懇話会（平成19年11月29日）

特別講演：「小児急性中耳炎の臨床と合併症」

小林 一女 先生（昭和大学 耳鼻咽喉科准教授）

一般演題：「当科における上顎洞真菌症について ～術式と術後治療～」

林 多聞 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「抜歯後感染に続発した難治性顎下部膿瘍の一例」

福岩 達哉 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

10. 第52回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成20年1月10日）

特別講演：「気道アレルギーとその治療戦略」

山田 武千代 先生

（福井大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講師）

一般演題：「右側に生じた下咽頭梨状窩瘻の一例」

直野 秀和 先生（鹿児島市立病院 耳鼻咽喉科）

「プラシチンカストの鼻茸好酸球浸潤抑制効果に関する臨床的検討」

吉福 孝介 先生（鹿児島県立大島病院 耳鼻咽喉科）

11. 第53回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（平成20年3月6日）

特別講演：「酸逆流により生じる耳鼻咽喉科領域の症状とその病態」

渡嘉敷 亮二 先生（東京医科大学 耳鼻咽喉科 准教授）

一般演題：「涙嚢オンコサイトーマの1例」

川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
「当科における鼻腔通気改善手術の検討」

田中 紀充 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. 第10回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム

第10回目を迎えました「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」は、稀な症例、問題症例を提示して、開業医、関連病院医師、大学医師で症例検討する形で例年行われてきました。当初は桜ヶ丘キャンパスで開催され、交通の便が悪いとの意見もあり、第9回は医師会館にて開催されました。第10回「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」を企画するに当たり、11月、12月の学会、研究会の予定を調整し、これまで日本新薬株式会社に共催いただいていた医局研修会を吸収する形で開催することとしました。以下にプログラムを掲載させていただきます。当日は、会場に満員の参加を頂いて、盛会に開催できたと考えております。私事ですが、2007年11月に医局長を拝命して、最初の仕事になりましたが、様々な経緯を経て無事開催できたこと、関係者、日本新薬株式会社の皆様には心より感謝申し上げます。

（文責：田中紀充）



第10回
桜島フォーラム

日時：平成19年12月13日（木） 19：00～

場所：鹿児島サンロイヤルホテル1階 「エトワールの間」
鹿児島市与次郎1丁目8番10号 TEL：099（253）2020

司会 鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 助教 林 多聞 先生

【症例検討】

「嚥下障害を来した膠原病の一例」

県立大島病院 耳鼻咽喉科 永野広海 先生

「ESSにて治療奏効した視束管骨折症例」

鹿児島生協病院 耳鼻咽喉科 積山幸祐 先生

「小脳橋角部腫瘍症例の前庭機能検査」

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 川島雅樹 先生

【基礎研究報告】

「広域スペクトラム経鼻ワクチンによる感染予防とアレルギーの制御」

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 宮下圭一 先生

【臨床研究報告】

「含嗽療法の扁桃摘出後の疼痛および創傷治療に対する効果」

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 講師 西元謙吾 先生

【特別講演】

司会 鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学 准教授 松根彰志 先生

『耳鼻咽喉科日常診療のピットホール』

鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学 教授 黒野祐一 先生

3. 「鼻の日」

平成19年8月12日〈日〉、午後1時より、鹿児島中央駅前のキャンセ7階におきまして、第8回 耳鼻咽喉科「鼻の日」（無料）市民講座が開催されました。40名の一般市民の皆様に聴講していただきました。今回のテーマは、「こどものいびき、おとなのいびき」でした。本講座は、例年どおり日本耳鼻咽喉科学会鹿児島県地方部会ならびに、大学教室の同門会との共催として行われました。

講演内容などは以下のごとくでした。

総合司会 西元謙吾 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科）

開会の挨拶 黒野祐一 先生

（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 教授）

講演

1. こどものいびきは、なぜおこる？ 無呼吸に注意！

田中紀充 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科）

2. たかがいびき、されどいびき、「おとな」と「こども」はどうちがう？

松根彰志 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科）

（松根）

4. 「耳の日ならびにアレルギー週間公開講座」

日時：平成20年3月9日（日）13時30分～15時

場所：鹿児島市勤労者交流センター（よかセンター鹿児島）第1会議室（7F）

今年は、例年それぞれ別々に開催している、耳の日市民公開講座とアレルギー週間公開講座を、同時に開催致しました。（それぞれ第53回耳の日市民公開講座、第14回アレルギー週間公開講座となります。）プログラムは以下の通り、第一部に耳に関する話題、第二部にアレルギーに関する話題と2部構成で講演を行いました。また、高齢者や難聴の方の参加を見込み、（中）日本補聴器販売店協会のご協力で、会場には赤外線補聴システムを準備しました。

第一部 「難聴 ーより良い聞こえを求めてー」

1. 聞こえのしくみと難聴

朝隈耳鼻咽喉科医院院長 朝隈真一郎先生

2. 補聴器と人工内耳の正しい理解のために

鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学 宮之原郁代先生

第二部 「花粉症・アレルギー性鼻炎の最新治療」

1. 花粉症のうそ・ほんと

鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学准教授 松根彰志先生

2. 小児アレルギー性鼻炎で気をつけること

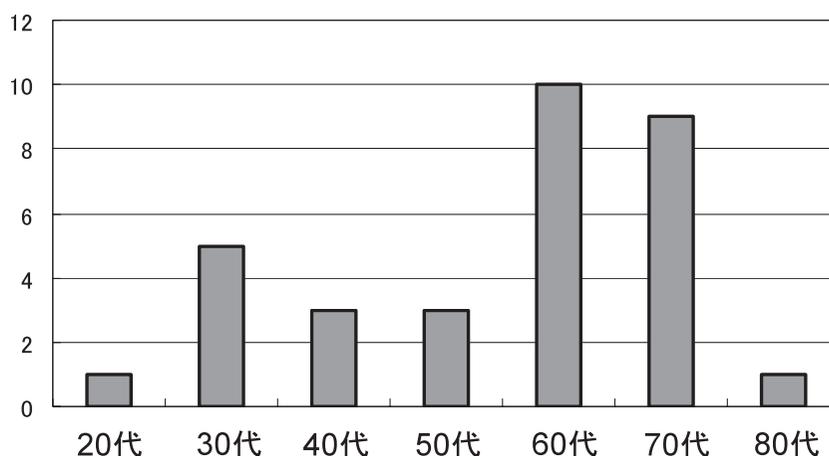
鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学教授 黒野祐一先生

天候が悪かったのですが、当日は41名のご参加があり、また質問も多数頂きました。最後に今回の企画についての評価目的にアンケートを行いましたので結果をご報告いたします。

アンケート回収率は、71%（32名）で、うち男性15名、女性17名でした。年齢構成は図1に示しましたように、60-70代が半数以上でした。

参加者(アンケート回収者)年齢構成

(人数)



1) 今回の講座についてどのようにして知りましたか？

新聞	72%
ポスター	3%
その他	25%

2) 講演内容はいかがでしたか？

わかりやすい 81%
 ややわかりにくい 16%
 むずかしい 3%

3) 講演時間はいかがでしたか？

ちょうどよい 84%
 短い 6%
 長い 0%

4) 講演日程はいかがでしたか？

土曜日午後がよい 22%
 日曜日午後でよい 59%
 平日夜がよい 0%
 回答なし 19%

5) その他

今後取り上げてほしいテーマとして、メニエール病、耳鳴り、副鼻腔炎、アトピー性皮膚炎などがあげられていました。また、意見・要望としては、継続して開催してほしい、時間をもっと長くしてほしい、もっと詳しく知りたいなどがあげられました。

以上の結果をふまえ、今後も社会に広くアピールできるような企画を、耳の日市民公開講座およびアレルギー週間公開講座として開催していきたいと思います。また、今回ご協力いただきました多くの皆さまにこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

(文責：宮之原郁代)

5. 2007年水曜セミナー

肺炎球菌の接着分子について～ChoPを中心に～	川島先生
小児睡眠時無呼吸症候群	松根先生
人工内耳手術における適応拡大 －両耳聴力の獲得と partial deafness cochlear implant－	宮之原先生
「気管・食道領域の救急疾患」喉頭・気管	福岩先生
眼窩壁骨折	牧瀬先生
舌根部 Sclerosing epithelioid fibrosarcoma の1例	宮下先生

Langerhans cell histiocytosis	大堀先生
扁平上皮癌以外の悪性腫瘍	西元先生
特発性低髄圧症候群	相良先生
小児睡眠時無呼吸 診断治療への取り組み	田中先生
両側性顔面神経麻痺	原田先生
嚥下機能改善手術および誤嚥防止手術	林先生
創傷治癒	早水先生
日常めまい診療についての提案 ～めまい平衡医学会医師講習会の報告も兼ねて～	川島先生
Nasal polyp	大堀先生
気道異物	宮下先生
扁桃周囲膿瘍におけるレボフロキサシンの組織移行性に関する検討	黒野先生
頸部リンパ節腫脹の診断	谷本先生
リンパ節結核におけるクオンティフェロン TB の意義について	西元先生
吸気時喘鳴について	相良先生
鼻腔通気改善手術 下鼻甲介粘膜下組織減量術	田中先生
急性音響外傷	原田先生
上顎洞真菌症	林先生
上咽頭癌	早水先生
ミクリッツ病と高 IgG4血症	川島先生
Aspirin-induced asthma	大堀先生
聴神経鞘腫の起源神経と症状との関連について	宮下先生
ステロイドとマクロライドの抗炎症・免疫調整機能の作用機転	松根先生
眼窩内異物	谷本先生
両側声帯麻痺	相良先生
舌下免疫 アレルギーに対する舌下免疫療法と抗原舌下投与による 抗原特異的粘膜免疫誘導	田中先生
急性中耳炎起因菌の薬剤耐性化～治験の結果もあわせて～	原田先生
Quincke 浮腫	林先生
舌下免疫	早水先生

鹿児島大学大学院医師学総合研究科・耳鼻咽喉科頭頸部外科学 同門会総会

平成20年1月19日（土）城山観光ホテルにて、同門会総会、ならびに地方部会との合同の学術講演会、新年会もかねた懇親会が開催されました。

概要は、以下のごとくです。

- | | |
|-------------|---|
| 16：30～17：00 | 鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学教室同門会役員会 |
| 17：00～17：30 | 同門会 総会 |
| 17：30～18：00 | 写真撮影 |
| 18：00～20：30 | 「黒野祐一教授就任10周年記念学術講演会」
地方部会との合同の学術講演会 |
| 20：30 ～ | 「黒野祐一教授就任10周年記念会」新年会・懇親会 |

黒野祐一教授就任10周年記念学術講演会

一般演題

座長 松根彰志 先生

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 准教授)

- ① 気管切開を必要とした高齢者鼻出血症例
大堀純一郎 先生 (鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科)
- ② 前頭切開を行い摘出した幼児眼窩内異物症例
田中紀充 先生 (鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科)
- ③ 外科的処置を繰り返し必要とした深頸部および縦隔膿瘍の1例
吉福孝介先生, 永野広海先生
(県立大島病院 耳鼻咽喉科)
- ③ 経鼻内視鏡下での前頭蓋底手術を行った篩骨洞癌手術症例
花牟礼 豊先生 (鹿児島市立病院 耳鼻咽喉科 部長)

特別講演 1

座長 花牟礼 豊 先生 (鹿児島市立病院 耳鼻咽喉科 部長)

演者 福山 聡 先生

ラホーヤアレルギー免疫研究所 (米国, カリフォルニア州) 研究員

演題 「リンパ組織形成誘導細胞の多様性」

特別講演 2

座長 山本 誠 先生 (山本耳鼻咽喉科 院長)

演者 黒野祐一 先生

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授

演題 「上気道粘膜ワクチン研究の現状と展望」

学術講演会終了後、「黒野祐一教授就任10周年記念会」として新年会・懇親会が城山観光ホテル内で、開催されました。同門会会長、山本 誠先生、ならびに鹿児島大学名誉教授、大山 勝先生のお祝いのお言葉をいただき、さらには教室員一同からの記念品の贈呈などが行われました。教室の現医局長である田中紀充先生の万歳三唱でお開きとなりました。

(松根)



鹿児島大学大学院歯学総合研究科聴覚頸部疾患学同門会総会
黒野祐一教授就任10周年記念 平成20年1月19日 於 城山観光ホテル

1. 巡回診療（県医務課）

- 三島村（平成20年1月5日～6日）
- 十島村（上4島）（平成20年1月19日～20日）
- 十島村（下3島）（平成20年2月16日～17日）

2. 身体障害者巡回診療

- 5月 薩摩川内市上甕
- 6月 薩摩川内市里
- 7月 三島村（黒島）
- 9月 十島村（小宝島）

3. 学校保健（統計報告）

平成19年4月から6月にかけて、当科において鹿児島県下の以下の耳鼻咽喉科学校検診を行った。

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，志布志市，垂水市，西之表市，財部町

【受診者数】

小学生5411名，中学生2937名，高校生323名

【対象疾患】

耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔弯曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，扁桃肥大の9疾患

【結果】

疾患別の有病率については、ここ数年の傾向どおり、鼻アレルギーが圧倒的に多く1割強であった。ついで、耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎の順であった（図1）。耳疾患についての有病率のみで見ると、どの学年でも同程度の割合であった（図2）。鼻疾患では、鼻アレルギーの学年ごとのばらつきはあるものの、1割前後の有病率であった（図3）。扁桃疾患では扁桃肥大はばらつきはあるものの学年とともに減少傾向であった。

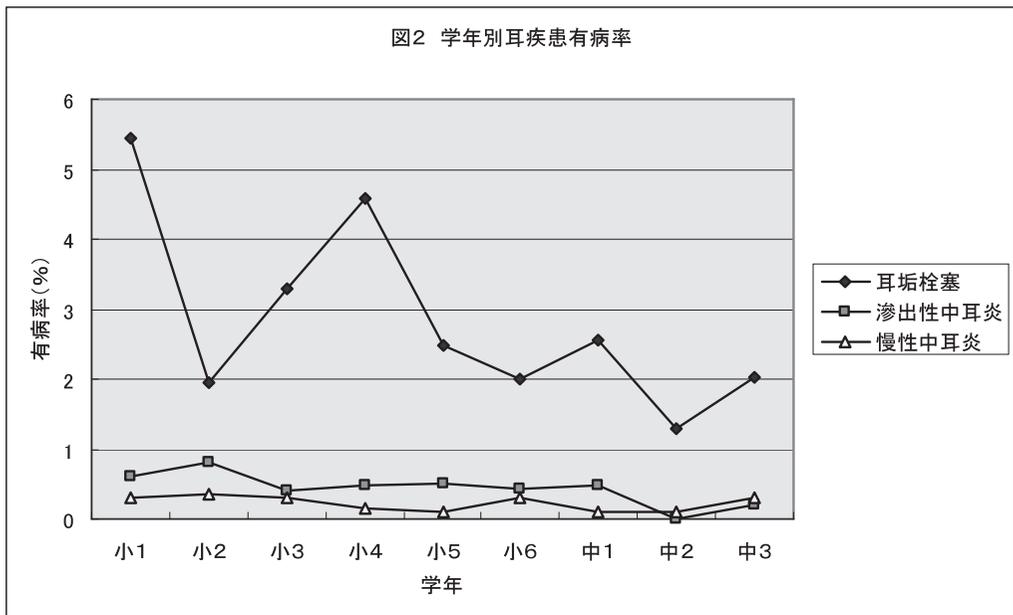
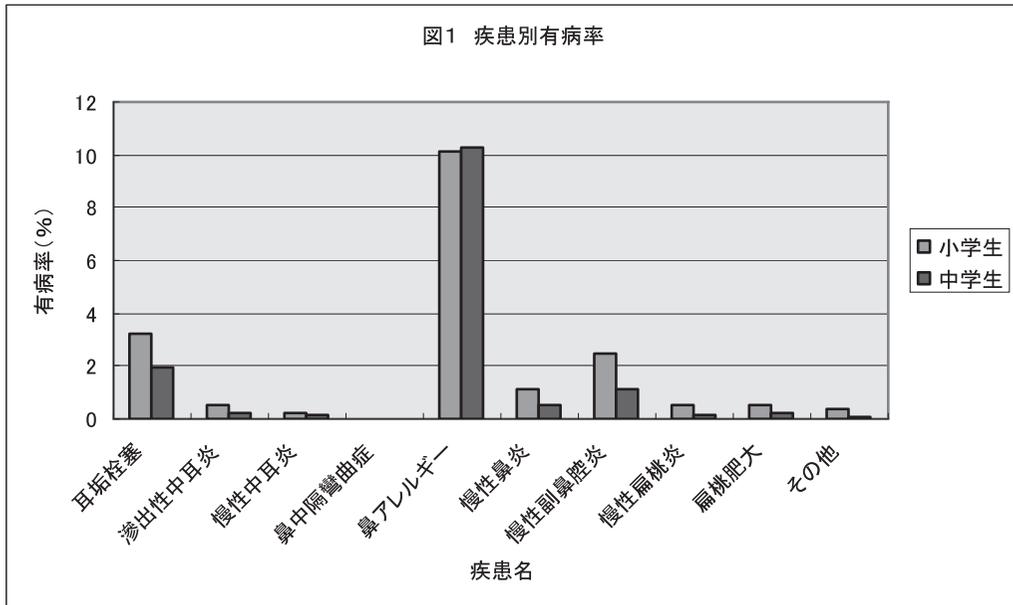


図3 学年別鼻疾患有病率

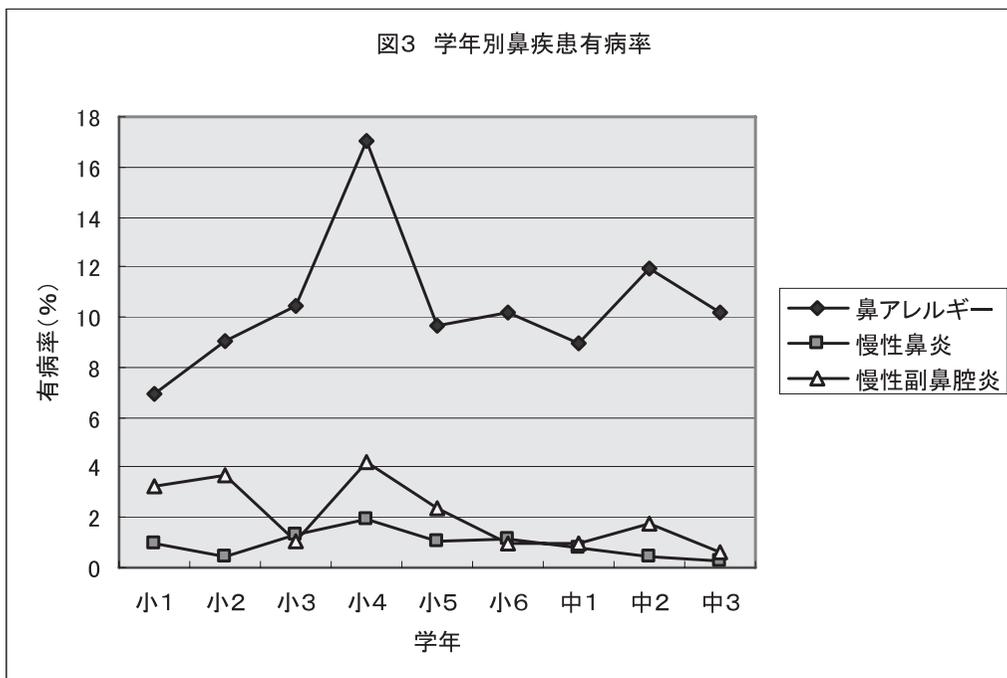
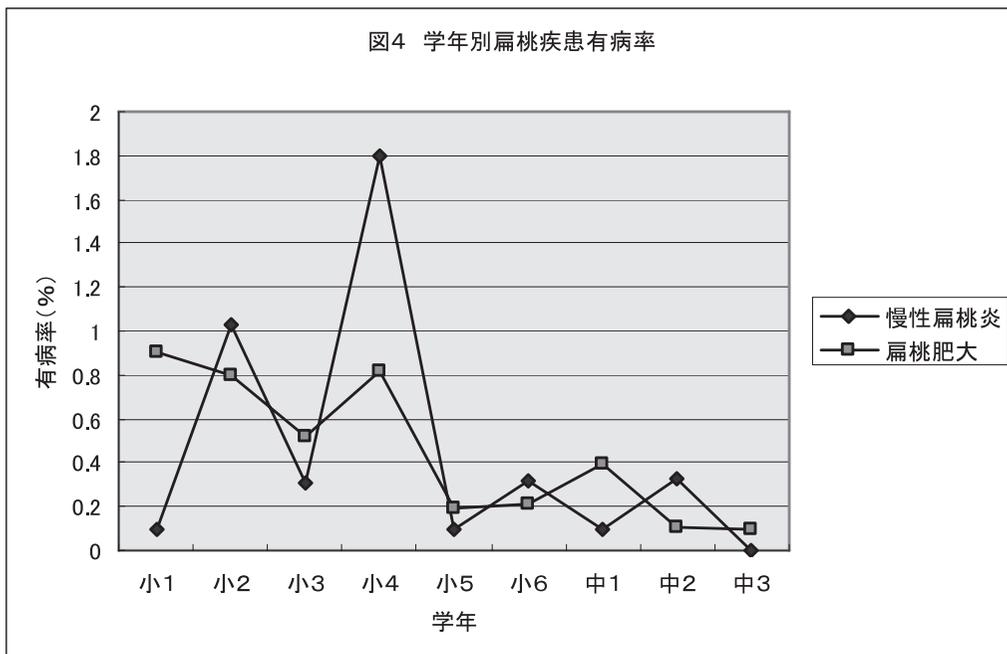


図4 学年別扁桃疾患有病率



1. アレルギー外来

アレルギー外来では、通年性アレルギーやスギ花粉症を中心に定期的な治療を行います。例年、鹿児島ではスギ花粉の飛散量は全国平均に比べて少ない傾向がありますが、初期療法を希望され、スギ花粉症の時期にはアレルギー外来の患者数は増加します。

一般的に、スギ花粉症の初期療法としては内服第2世代抗ヒスタミン薬が使われる場合が多く、有効性も広く認められておりますが、眠気などの副作用もあり、初期療法としての問題点を抱えている部分もあります。現在、当科ではスギ花粉症に対する初期療法を第2世代抗ヒスタミン薬である塩酸レボカバスチン点鼻薬で行う検討なども行っており、スギ花粉飛散数が2,000個/cm³以下の少量飛散地における検討で、鼻症状スコアが有意に低い傾向が認められました。今後もスギ花粉症に対する初期療法について、引き続き検討を行っていきたいと考えております。(文責：相良ゆかり)

2. 副鼻腔炎外来

毎週(木)の午前中を中心に副鼻腔炎外来をおこなっています。大学での内視鏡下鼻内副鼻腔手術の術後を診るのがもともとの目的でありましたが、現在は中でも好酸球性副鼻腔炎症例が中心です。本外来は、治療成績を上げるための診療行為が第一の目的ですが、臨床研究の場でもあり、病態研究や有効な治療方針を検討していくために大変重要な機会となっています。また、ポリクリの学生さんにも2週間のうち1回は、ここで「気道系炎症を総合的に見ることが重要である。」をテーマとして、たまには鼻呼吸障害と睡眠時無呼吸症候群の話なども交えながら実習をしてもらってます。最近、好酸球性副鼻腔炎では、嗅覚障害が非常に出やすいという話のついでに、カード式の「嗅覚検査」を体験してもらっていますが、意外にもこれが大変好評です。

今年は、9月に名古屋で開催される鼻科学会総会の臨床問題懇話会で、好酸球性炎症やアレルギーと副鼻腔炎について発表の機会を与えていただいています。また、島根大学の川内教授顧問のご指導の下、横浜市立医療センターの石戸谷教授や、他大学のactiveな先生方とともに「気道好酸球性炎症を考える会」を12月に旗揚げを目標に準備しており、本外来での成果を少しでも多く全国に向けて発信していけたらと考えてます。今後とも宜しく御願います。

(文責：松根)

3. 頭頸部腫瘍外来：毎週木曜日（予約制）

頭頸部腫瘍患者の治療後のための特殊外来である頭頸部腫瘍外来は患者数が増大しており、ますますその重要性が増してきています。再来を受け持つ Dr もかなり多忙になってきています。

平成19年4月から平成20年3月までの新規悪性腫瘍登録数

喉頭癌	： 27例
中咽頭癌	： 15例
下咽頭癌	： 12例
舌癌	： 12例
甲状腺癌	： 8例
口腔底癌	： 2例
歯肉癌	： 4例
硬口蓋癌	： 5例
鼻副鼻腔癌	： 7例
唾液腺癌	： 7例
聴器癌	： 2例
上咽頭癌	： 4例
その他	： 5例
<hr/>	
計	： 112例

昨今の地方における医療情勢の悪化や鹿児島県の医療体制の変化に伴い、平成20年度から鹿児島市内に悪性腫瘍患者が集中する事が予想され、今後はさらに多くの悪性腫瘍患者の受診が予想されます。外来における悪性腫瘍患者の経過観察も大学病院だけでなく地方部会の先生方にも御協力いただかなくてはいけない状況になっていますので、御負担をお願いする事になるかも知れませんがよろしくお願い申し上げます。

（文責：西元）

4. 難聴・耳鳴り外来

難聴・耳鳴り外来

金曜日（午後）（月3回）

補聴器外来

毎週月（終日）・水（午前）

難聴・耳鳴り外来は、2003年4月に開設以来、本年度で丸4年を迎えました。当外来では、主に Jastreboff によってはじめられた指向性カウンセリングと音治療を組み合わせた耳鳴り治療法 TRT（Tinnitus Retraining therapy）を中心に行っています。少しずつですが治療経過のデータも得られてきました。

Jastreboff は約1年の治療期間を推奨しているため、患者フォローも長期にわたり、これに伴う問題点もあります。つまり、定期的いきちんと受診する患者がいる一方で、短期間でよくなったため自己判断で通院しなくなりノイズジェネレーターのみ継続して使っている患者もおり患者フォローが難しいことです。（残念ながらこのような方々は、受診を促しても住居が遠い、交通の便が悪いなどの理由で再診頂くことはほとんどありません。）正確な治療効果や副作用などの情報を得るためにも患者フォローについては今後工夫が必要かと思っています。

補聴器外来では、補聴器フィッティングから聴覚障害についての管理指導・患者啓蒙を行っています。
(文責：宮之原郁代)

		総施行件数	676	(2007.4月～2008.3月)	
		病棟	372		
		外来	304		
1)腫瘍	悪性			良性	
喉頭腫瘍	SCC	37		squamous papilloma	2
	SCC in situ	1			
	adenosquamous carcinoma	1			
甲状腺腫瘍	papillary carcinoma	15		follicular adenoma	5
	malignant lymphoma	1		adenomatous goiter	2
上咽頭腫瘍	SCC	3			
	Imphoepithelioma like carcinoma	1			
	malignant lymphoma	1			
中咽頭腫瘍	SCC	17		squamous papilloma	4
	malignant lymphoma	6		epithelioid granuloma	2
下咽頭腫瘍	SCC	15			
	basaloid SCC	2			
上顎洞腫瘍				cavernous hemangioma	1
鼻腔腫瘍	SCC	4		inverted papilloma	10
	malignant melanoma	3		squamous papilloma	3
	malignant lymphoma	1			
耳下腺腫瘍	adenocarcinoma	1		Warthin tumor	19
	largecell undifferentiated carcinom	1		pleomorphic adenoma	9
				basalcell adenoma	6
顎下腺腫瘍	adenoid cystic carcinoma	2			
	basalcell adenocarcinoma	1			
	malignant lymphoma	1			
舌腫瘍	SCC	15		squamous papilloma	2
	angiosarcoma	1			
軟口蓋腫瘍	adenocystic carcinoma	2		squamous papilloma	2
	SCC	1			
硬口蓋腫瘍	SCC	3			
歯肉腫瘍	SCC	8			
口腔底腫瘍	SCC	2			
頬粘膜腫瘍	SCC	2			
副咽頭間隙腫瘍				schwanoma	1
頸部腫瘍	malignant lymphoma	9			
	SCC	8			
	adenocarcinoma	1			
上顎腫瘍	SCC	2			
外耳道腫瘍	SCC	2			
中耳腫瘍				cholesteatoma	7
2)前癌病変					
	dysplasia	20			

(平成20年4月現在)

文部科学省科学研究費

基盤研究 (B) (2)

舌下免疫 - 粘膜ワクチンの新たな投与経路としての有用性に関する研究

研究代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志 吉福孝介 田中紀充 大堀純一郎

若手研究 (B)

鼻アレルギーマウスモデルを用いた粘膜免疫の検討

研究代表者 田中紀充

若手研究 (B)

長期持続型経鼻ワクチンの開発とその有効性に関する研究

研究代表者 福岩達哉

厚生労働省科学研究費補助金

代替医療の実施と有効性の科学的評価

主任研究者 岡元美孝 (千葉大学 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学)

分担研究者 黒野祐一

1. 原 著

- (1) 藤枝重治, 宮之原郁代, 黒野祐一 他37名
「スギ花粉症における第2世代抗ヒスタミン薬の臨床効果」
－多施設, 3ヵ年による初期治療と発症後治療の検討－
日本鼻科学会会誌 46(1):18-28, 2007
- (2) 川島雅樹, 松根彰志, 黒野祐一
「鼻副鼻腔に発生した孤立性線維性腫瘍例」
耳鼻臨床100(8):669-674, 2007
- (3) K.Yoshifuku, S.Matsune, J.Ohori, Y.Sagara, T.Fukuiwa, Y.Kurono
IL-4 and TNF- α increased the secretion of eotaxin from cultured fibroblasts of nasal polyps with eosinophil infiltration
Rhinology 45: 235-241, 2007
- (4) 吉福孝介, 永野広海, 黒野祐一
「眼窩骨膜下膿瘍の1症例」
耳鼻咽喉科展望50(4):236-243, 2007

2. 総 説

- (1) 松根彰志
「小児と成人の副鼻腔炎の違い」－疫学と病態の観点から－
日本鼻科学会会誌 46(1):66-67, 2007
- (2) 黒野祐一
特集 アレルギー性鼻炎の新しい治療法
(花粉症を中心に)
アレルギーの臨床 27(1):16, 2007

- (2) 福岩達哉
第18回 鹿児島消化管治療研究会
シンポジウム 「日常医療に潜むGERDについて」
GERDと耳鼻咽喉科疾患
Pharma Medica 25(2) : 70-84, 2007
- (3) 松根彰志
特集Ⅱ 上気道疾患のマクロライド療法
「サイトカイン, VEGF, シグナル伝達, 転写因子とマクロライド」
臨床免疫・アレルギー科 47(3) : 331-336, 2007
- (4) 黒野祐一, 吉福孝介
特集 好酸球性病変の診断と治療
好酸球性副鼻腔炎の疫学・診断
JOHNS 23(6) : 844-846, 2007
- (5) 黒野祐一
粘膜免疫研究の最先端
粘膜免疫による耳鼻咽喉科疾患の制御
医学の歩み 221(11) : 887-890, 2007
- (6) 黒野祐一, 福岩達哉
経鼻粘膜ワクチンの現況と展望
耳鼻咽喉科展望 50(3) : 136-141, 2007
- (7) 福岩達哉, 西元謙吾, 林 多聞, 黒野祐一
頭頸部癌手術周術期感染予防に関する検討
日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 25(1) : 241-246, 2007
- (8) 松根彰志, 積山幸祐, 花牟礼 豊, 黒野祐一
特集・鼻科画像診断マニュアル 急性副鼻腔炎の合併症
MB ENT 77 : 33-38, 2007

- (9) S.Matsune, J.Ohori, K.Yoshifuku and Y.Kurono
[REVIEW] Vascular endothelial cells and eosinophil infiltration in allergic rhinitis
Clinical and Experimental Allergy Reviews 7 : 5-10, 2007
- (10) 福岩達哉, 黒野祐一
喉頭・気管・食道領域の救急対応と医事問題—喉頭・気管領域—
日本気管食道科学会「専門医通信」34 : 8-15, 2007
- (11) 西元謙吾, 黒野祐一
—カラー図説— 「急性副鼻腔炎眼窩合併症の診断と治療」
耳鼻臨床 100(8) : 614-615, 2007
- (12) 黒野祐一
アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点
八女筑後医報 320 : 14-16, 2007
- (13) 黒野祐一
気道アレルギー診療における留意点—One Airway, One Disease の観点から—
日本気管食道科学会会報 58(2) : 217-219, 2007
- (14) 松根彰志
温熱エアロゾル療法 耳鼻咽喉科展望 50(補3) : 129-132, 2007
- (15) 黒野祐一
鼻疾患と中耳炎 鼻アレルギーフロンティア 7(3) : 18-22, 2007
- (16) 松根彰志
特集 地域医療との共生—術後処置の依頼と紹介
副鼻腔鼻内手術—その登場の歴史と治療管理を踏まえて—
耳鼻咽喉科・頭頸部外科 79(11) : 825-828, 2007
- (17) 松根彰志, 黒野祐一
特集・耳鼻咽喉科における小児への投薬 鼻出血
MB ENT 79 : 67-70, 2007

(18) 松根彰志

特集・アレルギーの病気で気になること Q & A アレルギー性鼻炎
ロイコトリエン拮抗薬のアレルギー性鼻炎への使い方
(ロイコトリエン拮抗薬はアレルギー性鼻炎にどう使うのですか?)
Q & A でわかるアレルギー疾患 3 (6) : 597-600, 2007

(19) 黒野祐一, 田中紀充

第1章 身体の入口における免疫機構
4. インフルエンザ菌感染と粘膜ワクチン
実験医学 25(20)増刊 : 43(3121)-47(3125), 2007

3. 国内学会発表

(1) 特別講演

九州大学医学部臨床講義 平成19年4月5日 (福岡市)
「上気道の免疫・アレルギー疾患」
黒野祐一

熊本大学医学部臨床講義 平成19年5月23日 (熊本市)
「上気道疾患と粘膜免疫」
黒野祐一

大分大学医学部臨床講義 平成19年7月3日 (大分市)
「口腔・咽頭癌」
黒野祐一

島根大学医学部臨床講義 平成19年7月23日 (出雲市)
「感染症と免疫機構」
黒野祐一

鳥取東部耳鼻咽喉科医会 平成19年7月26日 (鳥取市)
「アレルギー性鼻炎の診断治療における留意点」
黒野祐一

フォーカスインタビュー 平成19年9月10日 (鹿児島市)

「今後の鼻アレルギー疾患治療のあり方について」

松根彰志

第17回鹿児島小児アレルギー研究会 平成19年10月5日 (鹿児島市)

「小児アレルギー性鼻炎診療における留意点」

黒野祐一

青森市耳鼻咽喉科医会 平成19年10月23日 (青森市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

黒野祐一

気管支喘息・アレルギー性鼻炎ガイドライン 平成19年11月10日 (福岡市)

「アレルギー性鼻炎領域における診断・治療のエッセンスと日常診療における対応」

黒野祐一

佐世保地区耳鼻咽喉科セミナー 平成19年11月10日 (佐世保市)

「花粉症の治療と第2世代抗ヒスタミン薬について」

松根彰志

第3回多摩花粉症治療フォーラム 平成19年11月28日 (武蔵野市)

「アレルギー性鼻炎とその周辺疾患」

黒野祐一

第7回御茶ノ水アレルギー研究会学術講演会 平成20年1月12日 (東京都)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診療における留意点」

黒野祐一

第42回大分耳鼻咽喉科臨床研究会 平成20年1月17日 (大分市)

「アレルギー性鼻炎の治療 ～Up Date～」

松根彰志

長崎県北花粉症フォーラム 平成20年1月24日 (佐世保市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症と下気道疾患」

松根彰志

第145回あぐら会 平成20年1月31日 (広島市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の治療における最近の話題」

松根彰志

座談会 (耳鼻咽喉科開業医及び勤務医) 平成20年2月6日 (岡山市)

「アレルギー性鼻炎とその周辺疾患の病態と治療」 - 最近の話題を中心に -

松根彰志

熊本アレルギー講習会 平成20年2月6日 (熊本市)

「アレルギー性鼻炎 日常診療のポイント」

黒野祐一

中予アレルギー性鼻炎懇話会 平成20年2月7日 (松山市)

「アレルギー性鼻炎, アレルギー性副鼻腔炎, 好酸球性副鼻腔炎の病態と鑑別診断」

松根彰志

アレルギー性鼻炎 in つくば2008 平成20年2月8日 (つくば市)

「アレルギー性鼻炎とその周辺疾患」

黒野祐一

福岡県内科医会・北九州ブロック会 平成20年2月13日 (北九州市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の治療における留意点」

黒野祐一

AR学術講演会 平成20年2月16日 (神戸市)

「アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

学術講演会 平成20年2月19日 (鹿児島市)

「上気道アレルギーの新しい病態と治療への展望」

黒野祐一

小倉内科医実施医家シリーズ講演会 平成20年2月27日 (北九州市)

「アレルギー性鼻炎と上下気道炎症の病態と治療」

松根彰志

長崎 Airway Forum 平成20年2月28日 (長崎市)

「アレルギー性鼻炎の治療『最近の話題』と耳鼻咽喉科から見た上・下気道炎症」

松根彰志

アレルギー性鼻炎学術講演会 平成20年2月28日 (盛岡市)

「アレルギーの診断・治療学について」

黒野祐一

第7回 Asthma Forum In OKAYAMA 平成20年3月5日 (岡山市)

「アレルギー性鼻炎治療における抗ロイコトリエン薬の位置づけ」

黒野祐一

Singulair 7th Anniversary Symposium 平成20年3月26日 (松本市)

「アレルギー性鼻炎治療における抗ロイコトリエン薬の位置づけ」

黒野祐一

教育セミナー

第57回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成19年11月1日～3日 (横浜市)

「小児アレルギー性鼻炎の治療における留意点」

黒野祐一

(2) シンポジウム

第20回日本口腔・咽頭科学会総会 平成19年9月6日～7日 (名古屋市)

扁桃シンポジウム

「扁桃は上気道において感染防御に働いているのか」

田中紀充, 黒野祐一

第46回日本鼻科学会総会・学術講演会 平成19年9月27日～29日 (宇都宮市)

「副鼻腔炎における組織修復 ～好酸球の意義～」

大堀純一郎

パネルディスカッション

2007 12th Congress of the International Rhinologic Society Venezia, Italy 5-8 Decmber, 2007

「Paediatric Rhinology」

Y.Kurono

(3) 一 般

第108回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成19年5月17日～19日 (金沢市)

「含嗽療法の口蓋扁桃摘出術後の疼痛および創傷治療に対する検討－第一報－」

西元謙吾, 早水佳子, 宮下圭一, 黒野祐一

「FDG-PET を用いた頭頸部原発不明癌の治療戦略」

林 多聞, 松根彰志, 福岩達哉, 西元謙吾, 黒野祐一

第19回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成19年6月10日～12日 (横浜市)

「血管内皮細胞増殖因子の鼻粘膜血管透過性亢進作用について

－ヒスタミンとの比較検討－」

松根彰志, 黒野祐一

「2006年スギ花粉飛散ピーク期における QOL 調査からみた初期療法の検討」

宮之原郁代, 松根彰志, 大堀純一郎, 西元謙吾, 黒野祐一

第31回日本頭頸部癌学会 第28回頭頸部手術手技研究会

平成19年6月13日～15日 (横浜市)

「遊離自家組織移植による再建術後の静脈血栓に関する検討」

福岩達哉, 西元謙吾, 林 多間, 黒野祐一

「頭頸部原発不明癌治療における FDG-PET の一位置づけ」

林 多間, 松根彰志, 福岩達哉, 西元謙吾, 黒野祐一

第6回鹿児島めまい研究会 平成19年6月21日 (鹿児島市)

「ゲンタマイシン鼓室内注入療法が有効であった遅発性内リンパ水腫の1例」

宮之原郁代, 牧瀬高穂, 西元謙吾, 黒野祐一

第22回九州連合地方部会学術講演会 第123回日耳鼻鹿児島県地方部会

平成19年6月30日～7月1日 (福岡市)

「顔面神経麻痺を認めた破傷風の1症例」

吉福孝介, 永野広海, 黒野祐一

「頬骨に発症した langerhans cell histiosytosis の1例」

大堀純一郎, 西元謙吾, 黒野祐一

「下咽頭食道有鉤義菌異物の直達鏡下摘出術の一工夫」

下麥哲也, 直野秀和, 笠野藤彦, 花牟礼 豊

第2回日本小児耳鼻咽喉科学会 平成19年6月23日～24日 (仙台市)

「小児扁桃周囲膿瘍の治療における問題点」

早水佳子, 西元謙吾, 黒野祐一

「当科における小児気管・気管支異物症例の検討」

宮下圭一, 福岩達哉, 西元謙吾, 松根彰志, 黒野祐一

第19回日本頭蓋底外科学会 平成19年7月4日～5日 (東京都)

「眼窩内へ進展した再発上眼瞼扁平上皮癌の一例」

福岩達哉, 西元謙吾, 牧瀬高穂, 林 多間, 黒野祐一

「滲出性中耳炎の治療中に脳神経症状を呈した上咽頭腺様胞癌症例」

林 多間, 相良ゆかり, 黒野祐一

第69回耳鼻咽喉科臨床学会総会および学術講演会 平成19年7月6日～7日（東京都）

「視力障害を合併する急性副鼻腔炎の問題点について」

早水佳子，牧瀬高穂，松根彰志，黒野祐一

「鼻涙管に発生した腺房細胞癌の1例」

川畠雅樹，福岩達哉，黒野祐一

「開口障害，顔面神経麻痺を認めた破傷風の1症例」

永野広海，吉福孝介，黒野祐一

第14回マクロライド新作用研究会 平成19年7月13日～14日（東京都）

「好酸球性副鼻腔炎由来，培養線維芽細胞に対する EM900の抗炎症効果」

松根彰志，大堀純一郎，吉福孝介，黒野祐一

「エリスロマイシン誘導体 EM900の抗炎症作用に関する検討」

原田みずえ，松根彰志，大堀純一郎，黒野祐一

第20回日本口腔・咽頭科学会総会 平成19年9月6日～7日（名古屋市）

「舌根部硬化性類上皮線維肉腫の1例」

宮下圭一，西元謙吾，福岩達哉，松根彰志，田口周平，北島信一，柳澤昭夫
黒野祐一

第37回日本耳鼻咽喉科感染症研究会，第31回日本医用エアロゾル研究会

平成19年9月21日～22日（旭川市）

「扁桃周囲膿瘍におけるレボフロキサシンの組織移行性に関する検討」

黒野祐一，相良ゆかり，林 多聞，川畠雅樹，西元謙吾

「抜歯後感染に続発した難治性顎下部膿瘍の1例」

福岩達哉，西元謙吾，田中紀充，大堀純一郎，林 多聞，黒野祐一

第46回日本鼻科学会総会・学術講演会 平成19年9月27日～29日（宇都宮市）

「嗅覚検査に関するアンケート調査結果」

美輪高喜，坂上雅史，深澤啓二郎，濱島有喜，原田博文，立川隆治，内田 淳
平田加寿子，小林正佳，松根彰志，太田 康

「鼻外手術を必要とした眼窩骨膜下膿瘍の1症例」

吉福孝介，永野広海，黒野祐一

「EM900の抗炎症作用に関する検討」

原田みずえ, 松根彰志, 大堀純一郎, 田中紀充, 福岩達哉, 砂坂敏明
大村 智, 黒野祐一

第17回日本耳科学会総会・学術講演会 平成19年10月18日～20日 (福岡市)

「小児滲出性中耳炎のXPSドリルにおけるアデノイド切除の効果」

相良ゆかり, 林 多間, 黒野祐一

第57回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成19年11月1日～3日 (横浜市)

「好酸球性副鼻腔炎の鼻茸由来培養線維芽細胞に対するEM900の抗炎症作用」

松根彰志, 大堀純一郎, 吉福孝介, 原田みずえ, 砂塚敏明, 木村 智, 黒野祐一

「使用実態調査からみた花粉症に対する第2世代抗ヒスタミン薬の選択基準の検討」

宮之原郁代, 松根彰志, 大堀純一郎, 西元謙吾, 黒野祐一

「アレルギー性鼻炎におけるVEGFとTGF- β の役割」

大堀純一郎, 松根彰志, 牧瀬高穂, 黒野祐一

第59回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会 平成19年11月1日～2日 (前橋市)

「待機手術と緊急手術時における気管切開手技の比較・検討」

福岩達哉, 西元謙吾, 林 多間, 宮下圭一, 黒野祐一

「当科における気管・気管支異物症例の検討」

宮下圭一, 西元謙吾, 積山幸祐, 松根彰志, 黒野祐一

第11回日本ワクチン学会学術集会 平成19年12月8日～9日 (横浜市)

「鼻粘膜におけるPhosphorylcholine 特異的免疫誘導とB1細胞」

田中紀充, 黒野祐一, 清野 宏

第18回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会 平成20年1月31日～2月1日 (京都市)

ビデオセミナー

「口蓋扁桃摘出術 - Cold instruments による術式 -」

福岩達哉

「XPSドリルを用いた下甲介粘膜下組織減量手術の使用経験」

田中紀充, 松根彰志, 林 多間, 黒野祐一

第26回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 平成20年2月21日～23日 (大阪市)

「舌下投与による Phosphorylcholine 特異的粘膜免疫応答」

田中紀充, 早水佳子, 宮下圭一, 福岩達哉, 福山 聡, 黒野祐一

第20回日本喉頭科学会総会学術講演会 平成20年3月13日～14日 (佐賀市)

「Vocal cord dysfunction の1例」

相良ゆかり, 西元謙吾, 田中紀充, 黒野祐一

「喉頭軟化症と小顎症を合併し睡眠時無呼吸を来たした1症例」

田中紀充, 西元謙吾, 黒野祐一

4. 国際学会発表

9th International Symposium on Recent Advances in Otitis Media

June 3-7, 2007 (Florida USA)

「Intranasal Immunization with Phosphorylcholine Reduced Type I Allergic Responses in Mice」

Y.Kurono, N.Tanaka, S.Fukuyama, K.Miyashita

「Nasal Vaccination with New DNA Adjuvants Elicit Long Lasting Immunity Mediated by Both Th1-And Th2-Type Cytokine and NALT Dendritic Cells」

T.Fukuiwa, K.Fujiyoshi, Jerry R. McGhee, Y.Kurono

「Intranasal Immunization with Phosphorylcholine Enhanced the Clearance of S. pneumoniae and Nontypeable H. influenzae from the Nasal Cavity」

N.Tanaka, S.Fukuyama, T.Fukuiwa, M.Kawabata, Y.Kurono

ICMI 2007 13th International Congress of Mucosal Immunology July9-12 Tokyo

「Nasal Vaccination with new DNA adjuvants elicit NALT dendritic cell activation for prolonged mucosal immunity」

T.Fukuiwa, S.Sekine, R.Kobayashi, H.Suzuki, K.Kataoka, Prosper N Boyaka, Arthur M Kreig, Jerry R McGhee, Y.Kurono, K.Fujiyoshi

「CXCR5/CXCL13-independent nasal B1 cells for the induction of antigen-specific secretory IgA responses」

N.Tanaka, S.Fukuyama, T.Nagatake, K.Takamura, Y.Kurono, H.Kiyono

第9回日本台湾耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会会議 平成19年11月9日～10日（仙台市）

〔Venous thrombosis after microvascular free-tissue transfer in head and neck cancer reconstruction〕

T.Fukuiwa, K.Nishimoto, T.Hayashi, Y.Kurono

〔Evaluation of the efficacy and complications of abscess tonsillectomy〕

K.Nishimoto, Y.Hayamizu, Y.Kurono

2007 12th Congress of the International Rhinologic Society Venezia, Italy 5-8 Decmber, 2007

〔Application of Dendritic Cell Targeting DNA Adjuvant for the New-Generation Nasal Vaccine〕

T.Fukuiwa

5. 学位論文要旨

医論 第1453号

IL-4 and TNF- α increased the secretion of eotaxin from cultured fibroblasts of nasal polyps with eosinophil infiltration

（IL-4およびTNF- α は、好酸球浸潤鼻茸由来線維芽細胞からのeotaxin分泌を増加させる）

吉 福 孝 介

【序論および目的】

鼻茸は慢性副鼻腔炎の一亜型として考えられており、好酸球は鼻茸における炎症細胞の中で最も一般的である。活性化好酸球の著しい集簇を伴う鼻茸は極めて難治性であり、しばしば非アトピー性の喘息やアスピリン喘息を伴っている。しかしながら、鼻茸に選択的に好酸球浸潤がおこる機序については不明である。

以前から、eotaxin, RANTESなどのケモカインやVCAM-1などの接着因子は、呼吸粘膜への選択的な好酸球浸潤に重要であることが知られている。鼻茸から分離された線維芽細胞からのVCAM-1の産生がTNF- α 刺激により増強され、TNF- α , IL-4, 13, エンドトキシンに反応してeotaxinやRANTESも産生する。

しかし、好酸球浸潤の豊富な鼻茸（Enp）および好酸球浸潤のない鼻茸（NEnp）における鼻線維芽細胞からの好酸球特異的ケモカインや接着因子の産生の相違については、明らかにされてはいない。そこで本研究では、EnpおよびNEnpから分離された鼻線維

芽細胞からの eotaxin, RANTES, VCAM-1の産生について観察し, ケモカインや接着因子の生産レベルを比較することで, 鼻茸組織における好酸球浸潤の機序について論じた。

【材料および方法】

①Enp と NEnp の分類

12人の慢性副鼻腔炎患者から手術により得られた鼻茸組織をホルマリン固定後に H-E 染色し, 200倍で検鏡し好酸球数をカウントした。12鼻茸検体において, 5 検体が好酸球数100以上であり, 3 検体が好酸球数10以上100未満であり, 4 検体が10または少数の好酸球数であった。好酸球数が10~100である3 検体については, 本検討から除外し, 好酸球数100以上を Enp, 10または少数の好酸球数を NEnp とした。

②細胞

内視鏡下鼻内副鼻腔手術により得られたヒト鼻茸から分離培養を行い, 第2世代目のヒト鼻茸線維芽細胞をすべての実験に用いた。

③ELISA

鼻茸線維芽細胞を TNF- α , IL-4で単独あるいは同時刺激, 24時間後の培養上清中の eotaxin, RANTES, VCAM-1濃度を ELISA 法にて測定した。

④RT-PCR

無刺激の鼻茸線維芽細胞をコントロールとし, TNF- α 単独刺激および TNF- α と IL-4の同時刺激後に鼻茸線維芽細胞より mRNA を抽出し, RT-PCR 法を用いて IL-4mRNA を測定した。

【結 果】

①VCAM-1産生

Enp, NEnp の両者において, TNF- α および IL-4の同時刺激にて VCAM-1の産生が著明に増加していた。TNF- α および IL-4の同時刺激による VCAM-1産生は TNF- α または IL-4単独刺激よりも有意に増加しており, 相乗効果と考えられた。しかし, NEnp と Enp との間に有意差はなかった。

②RANTES 産生

RANTES の産生は TNF- α 刺激で有意に増強され, IL-4刺激では変化しなかった。TNF- α および IL-4の同時刺激による RANTES 産生はコントロール群と比較して高値であったが相乗効果は認められなかった。また, NEnp と Enp との間に有意差はなかった。

③eotaxin 産生

eotaxin の産生は, NEnp, Enp はともに IL-4刺激で有意に増強され, TNF- α 刺激では増強されなかった。IL-4刺激による eotaxin 産生は NEnp よりも Enp において著明であり, TNF- α および IL-4の同時刺激にて著明に増加していた。さらに, TNF- α および IL-4の同時刺激による eotaxin の産生は, TNF- α または IL-4単独刺激よりも有意に増加

し、相乗効果が認められた。

④IL-4mRNA の発現

IL-4mRNA の発現はコントロール群においても認められ、TNF- α 刺激での増強効果はなかった。また、TNF- α および IL-4の同時刺激にても IL-4mRNA の有意な亢進はなく、NEnp と Enp との間にも有意差はなかった。

【結論及び考察】

本研究によって、鼻茸線維芽細胞からの eotaxin 産生は IL-4刺激により誘導され、TNF- α との共刺激により相乗的に増強されることが分かった。また、eotaxin の産生は、NEnp よりも Enp が有意に高く、これに対して、VCAM-1や RANTES の産生は Enp と NEnp とで有意差を認めなかった。これらの所見から、Enp における好酸球の遊走活性に eotaxin が重要な役割を担い、鼻線維芽細胞の eotaxin に対する反応性は NEnp よりも Enp のほうが高く、これが好酸球性副鼻腔炎や鼻茸の病態に深く関与していることが示唆された。(Rhinology 45, 235-241, 2007 掲載)

1. 医局人事（平成20年6月現在）

教 授	黒野祐一
准 教 授	松根彰志
講 師	福岩達哉
助 教	林 多聞, 吉福孝介, 田中紀充, 大堀純一郎
医 員	早水佳子, 宮下圭一, 原田みずえ 川島雅樹, 牧瀬高穂, 馬越瑞夫
大学院生	川島雅樹, 牧瀬高穂

医 局 長	田中紀充
外来医長	吉福孝介
病棟医長	林 多聞

関連病院（平成20年6月現在）

鹿児島医療センター	西元謙吾
国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
県立大島病院	休診
鹿屋医療センター	休診
済生会川内病院	上村隆雄
鹿児島生協病院	積山幸祐
藤元早鈴病院	森園健介
あまたつクリニック	谷本洋一郎
鹿児島市立病院	高木 実

2. 学会報告

第19回日本アレルギー学会春季臨床大会

宮之原 郁 代

2007年6月10日、11日、12日に横浜で開催された第19回日本アレルギー学会春季臨床大会に松根助教授、宮下先生とともに出席しました。招請講演では、清野宏先生が「粘膜免疫を介したアレルギー制御」のタイトルで、粘膜免疫の視点から捉えたアレルギーのメカニズムについて系統的に話をされ、とても印象深く新鮮に感じました。福山先生にも久しぶりで会うことができよかったです。坊主頭になっていたのにはちょっと驚かされました。

その他盛りだくさんの企画のなかに、アレルギー性鼻炎・結膜炎診療の諸問題についてのシンポジウムもありました。アレルギー—性結膜炎の話は、鹿児島でなかなか聞く機会がないため、一度そのような機会があればアレルギー性鼻炎を診療する耳鼻科医としての実地臨床に役に立つのではないかと思われました。

第2回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

早水佳子

第2回日本小児耳鼻咽喉科学会は平成19年6月23日（土）、6月24日（日）の両日にわたり、東北大学耳鼻咽喉・頭頸部外科小林俊光教授主管の元、仙台市において開催されました。

小児科サイドからの多様な意見も聴く事が出来、また、小児の喉頭乳頭腫の教育講演も興味深いものでした。

ところで、生憎、その頃の南九州地方は6月1日に入梅した影響を受け、大雨の天気が続いており、移動日となった22日は、鹿児島県錦江町では、1時間当たり107ミリの降雨量を記録し、(気象庁の発表では観測史上1位だそうです。)空の便は、概ね欠航状態となっていました。

参加したのは、教授を含め、松根准教授・福岩先生・宮下先生・自分の合計5人でした。

教授・准教授は、当たり前ですが、いち早く天候の不具合を察知した福岩先生は、機転を利かし予定通り仙台入りを果たすことが出来ました。しかし、宮下先生と私は、思

惑通り天気の様子の意地悪にまんまと引っ掛かり、足止めを喰らう事となりました。つまり、前日出発は叶わなかったのです。

私は2日目発表でしたので余裕があったのですが、宮下先生は、23日（土）の午後一番発表とのことで、翌朝一番に羽田に飛び、すぐさま東京駅へ移動し、新幹線を利用して仙台入りを果たすという苦労を重ねる羽目となりました。

仙台名物の牛タンも確かに美味しかったし、学会も素晴らしかったのですが、私の脳裏には22日の金曜夕方に、鹿児島空港でオロオロし、『どうしよう、どうしよう、仙台に行けないよ…』と大雨の打ちつける滑走路を窓越しに見ながら呆然と座り込む、宮下先生との姿が強烈に残っています。

第3回は鹿児島です。頑張りつつ、楽しみつつ…ですね。

第22回九州連合地方部会学術講演会（平成19年6月30日～7月1日）

下 麥 哲 也

2007年度の、九州連合地方部会は福岡県で開催されました。

今回、私は、野球と発表、フルに参加させていただきました。

まず、恒例の医局対抗野球大会ですが、今回は福岡でも、博多から少しはなれた、海沿いの雁ノ巣球場というところで開催されました。

雁ノ巣球場とはあまり聞きなれない場所でしたが、実は福岡ダイエーホークスの練習場にも指定されており、大会当日も、公開練習があり、晴天にも恵まれたためか、多くの人でにぎわっていました。

さて、鹿児島大学の野球の成績は、1回戦の宮崎大学に惜しくも（？）破れ、雁ノ巣球場の砂は持ち帰ることなく、天神の街に凱旋したのです。

明けて翌日、九州大学キャンパスで学術講演会は開催されました。

私は、市立病院で経験した、下咽頭異物症例について、口演で報告しました。

何年たっても、演壇に立つと緊張するものですが、今回は口演後の質問、追加についても、笑顔でしっかりと対応することができました。

すこしは成長したのかなぁと思いつつも九州大学を後にし、帰途につきました。

第19回頭蓋底外科学会

福 岩 達 哉

7月4日(水)から5日(木)の2日間、東京品川(御殿山ラフォーレ東京)にて第19回頭蓋底外科学会が開催され、福岩と林多聞先生とで参加してきました。参加することになった経緯なのですが、3月の鹿児島県地方部会に鎌田信悦先生がお越しになられた際、今回本学会の会長を務められるとのお話があり何か演題を出して欲しいとの御要望を頂いたことがきっかけです。またその際黒野先生の御提案にて2題演題を出すこととなりました。

本学会の目玉はアメリカで頭蓋底外科手術を4000例以上こなしておられる福島孝徳先生の御講演と、頭頸部外科の世界的権威である Jatin P. Shah 先生の御講演でした。Shah 先生は鎌田先生をして世界最高峰の頭頸部外科医と言わしめる程であり、また先生の著作である頭頸部外科手術の教科書「Head and Neck Surgery and Oncology」は皆さん御存知のように豊富な写真と細かい説明とが素晴らしく、私も数ある教科書の中でこの本を最もよく読んで勉強しています。イギリスでは過去5年間に出版された耳鼻咽喉科学書の中で本著が最優秀であると表彰されているそうです。Shar 先生によると、初版を書くのに実に4年半かかったそうです。2009年までには第4版が出るとのことでもこれもまた楽しみです。講演では副咽頭間隙腫瘍の御講演を生で聞くことができ非常に良かったです。

さらに、懇親会では鎌田先生にご紹介していただき Shah 先生と直接お話しする機会を頂きました。頭頸部外科医が減少している日本の現状を鎌田先生から伺って心配していたとのことで、私のような若手が頭頸部外科医を志していることを知って喜んでくださり、またしっかり頑張るようにとの励ましの言葉まで頂き、大変感動しました。鎌田先生、Shah 先生の2大巨頭に囲まれつつお話をさせていただいたことは、一生忘れないであろう思い出になると同時に、頭頸部外科医として今後の診療を続けていく上で大きな励みになると思います。改めて背筋が伸びる思いで一杯です。

学会で得たことも沢山ありましたが、なにはともあれ Shah 先生とお話できたことが最高の喜びでした。これまで「最高に感動した時は？」と質問されたら「鹿児島アリーナで全日本プロレスの試合を観た時、駐車場で暴れるスタン・ハンセンを生で観ながら、アブドーラ・ザ・ブッチャーにサインをもらった時」と答えていましたが、これからはその答えが変わりそうです。

追伸：ちなみにブッチャーのサインは、カタカナで「ブッチャー」と書くだけのもので、いろんな人に見せましたが誰も本物だと信用してくれません。

第69回耳鼻咽喉科臨床学会・学術講演会

永野 広海

平成19年の第69回耳鼻咽喉科臨床学会 学術講演会は、7月6日7日の2日間の日程で、東京（品川プリンスホテル）にて開催されました。今回は、東京医科大学の鈴木衛先生が主催された会でした。当教室からは、私が【開口障害、顔面神経麻痺を認めた破傷風の1症例】、早水先生は【視力障害を合併する急性副鼻腔炎の問題点について】、川島先生は【鼻涙管に発生した腺房細胞癌の1例】をポスター発表させて頂きました。

また招待講演は University of Toronto の Patrick Gullane 先生が Head and Neck Surgery: Then, Now and the Future と題し、頭頸部領域の歴史を大変興味深く講演していただきました。また他の講演も実地臨床にそくした大変興味深いものばかりで大変参考になりました。

久しぶりに東京でしたが、学生時代に遊んでいた街もすっかり様変わりしていて時代の変化の早さも痛感しました。ただ吉野家の牛丼の味は変わっていませんでした。

（文責：永野広海）

第14回 マクロライド新作用研究会

原田 みずえ

平成19年7月13日、第14回マクロライド新作用研究会が東京大学で行われ、黒野教授と松根准教授と私の3人で参加させて頂きました。私はこの会には初参加で、これをきっかけに私も少々マクロライドについて勉強したわけですが、マクロライドには、抗菌作用以外に、抗炎症作用、モチライド作用などさまざまな作用があり、耳鼻科だけでなく、いろいろな科の先生方がマクロライドについて研究されているのを知り、奥が深いのに大変驚きました。

近年、耳鼻科領域では、慢性副鼻腔炎や滲出性中耳炎に対し、マクロライドの抗炎症作用を期待して、マクロライド少量長期療法が根付いてきています。今回の発表では、松根准教授と私は、北里大学北里生命科学研究所の砂塚敏明先生、大村智先生より、マクロライドの抗菌作用を排除し、抗炎症作用のみをもった新規化合物 EM900をいただき、それを使った実験結果の発表をさせて頂きました。検体数が少なく、満足いく結果を示せなかったため、EM900をなんとか世に出そうとがんばっていらっしゃる砂塚先生や大村先生に申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまいました。

発表がなんとか終わり、ちょっと暗い気持ちで、私はその日のうちに鹿児島に帰り、翌日には専門医講習会のため、とんぼ返りで東京に行くことになっていましたが、折りしも運悪く、鹿児島に台風が接近し、飛行機が欠航になったため、私は鹿児島へ帰ることができなくなり、東京にそのまま延泊し、台風の真っ只中で専門医講習会を受け、帰ってきました。この研究会に参加していなければ、専門医講習会を受けることができなかったのも、帰ってくる時にはちょっとラッキーな気分になっていました。

第20回日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会

宮 下 圭 一

平成19年9月6日と7日に愛知県名古屋市の名古屋東急ホテルであった第20回日本口腔・咽頭科学会総会に黒野先生、松根先生、田中先生とともに参加しました。田中先生は2日目の扁桃シンポジウム「扁桃の謎に挑む」というテーマで「扁桃は上気道において感染防御に働いているのか」というディスカッションに参加されました。自分は「舌根部硬化性類上皮線維肉腫の1例」という演題で口演発表を行いました。シンポジウムでは「OSAS 診療における実地医家と専門医の連携」、「口腔・咽頭科領域の診療：他科との境界と連携」という内容で、いずれも興味深い内容でした。特に頭頸部領域疾患の治療を歯科口腔外科と耳鼻咽喉科でどう扱っていくかという内容では、現状を知ることができ、深く考えさせられました。

名古屋では味噌カツやういろう、名古屋コーチンなど堪能しました。空港も「セントレア」という国際空港ができており、広くてとてもきれいでした。

第46回日本鼻科学会総会・学術講演会

大堀 純一郎

平成19年9月28日、29日に開催された第46回日本鼻科学会に参加した。自治医科大耳鼻咽喉科の市村恵一先生が会長で、宇都宮で開かれました。当科からは、黒野教授、松根准教授、大堀、天辰病院から原田先生、県立大島病院から吉福先生が参加いたしました。

松根先生は、日本韓国合同セッションにてESSのビデオ演題を発表されておりました。ESSによる前頭洞手術におけるコツを発表されました。はからずも発表前日のスポンサードレクチャーでアメリカのleopold先生が“Can all frontal sinus surgery be endoscopic?”と題して講演されておりました。松根先生の演題は、0度の内視鏡にていかに良好な視野を得るかという演題で、aggel nasi cellを十分に開放することにより操作のしやすい0度内視鏡下に55度のカーブバーを使用して前頭洞を開放するという内容でした。Leopold先生は30度の内視鏡を使うということでした。Leopold先生の前頭洞解放では、aggel nasiの粘膜で、粘膜弁を作り、その粘膜弁を前頭洞底の開放部に被覆するというコツを発表されておりました。

私は、黒野先生と神戸の丹生先生の司会のもと、鼻副鼻腔の組織修復というテーマのシンポジウムで、初めてのシンポジストをさせていただきました。メイン会場の舞台上で司会の先生の質問に答えるという大それたことをしてしまいましたが、何とかこれまでの実験内容から鼻茸への好酸球浸潤に関して自分なりの解釈と意見を述べられたのではと思っております。司会の黒野先生から見たら、テレビ番組の「はじめてのお使い」にでていた3歳児を見守るような気持ちだったのかもしれませんが・・・

原田先生は、マクロライドの抗炎症作用のみをのこした誘導体であるEM900という薬物を使っての演題を発表し、今後EM900に関しては、鹿児島大学がリードして研究を行っていくのだということを全国の鼻科学の先生方に認めていただいたようです。

吉福先生は、眼窩骨膜下膿瘍を鼻外切開にて治療した症例報告を発表されました。会場の先生方には、保存的加療を行うべきだとの意見もありましたが、頭頸部外科医である我々は、膿瘍のドレナージを積極的に行うべきだという意見をしっかりと主張されておりました。

学会全体を通しては、以前より基礎的な演題が少なくなっているような印象を受けました。各大学ともにマンパワー不足には悩まされていると感じました。学会のパネルディスカッションでは、前頭蓋底手術をテーマに行われ、開頭術と鼻内視鏡を併用して鼻腔腫瘍にアプローチする方法はとてもきれいな手術だという印象を受けました。

第17回日本耳科学会総会・学術講演会

相 良 ゆかり

平成19年10月18～20日に第17回日本耳科学会・学術講演会が福岡国際会議場で行われました。鹿児島からは、黒野教授、相良の二人が参加いたしました。今回第1日目のランチョンセミナー2にてめまいの治療－外科的治療を中心ということで、BPPVに対して低侵襲で、聴力も温存できる半規管遮断術を鈴木衛先生が講演されました。半規管を丁寧に開窓される部分などは、いとも簡単な手技のようにさえみえて不思議な感覚を覚えました。また2日目の臨床セミナー1で宮崎大学放射線科の小玉隆男先生が細かく、疾患別に側頭骨の画像診断を講演され、これまで試験開放術の適応になっていた病態が、ここまでMRIやCTなどの画像で診断がつくようになってきているのかと、感銘をうけました。さらに耳の分野では画像評価が進んでくることを実感しました。一般演題も臨床、研究分野いずれもエントリーが多く、耳疾患にたいする関心の高さを改めて実感した学会でした。

第59回日本気管食道科学会総会

宮 下 圭 一

平成19年11月2日と3日に群馬県前橋市の群馬県民会館で第59回日本気管食道学会総会ならびに学術講演会に黒野先生、福岩先生とともに参加しました。福岩先生は「待機手術と緊急手術時における気管切開手技の比較・検討」という演題で口演を行い、自分は「当科における気管・気管支異物症例の検討」という題目で過去5年間の気道異物症例をまとめたポスター演題を発表いたしました。シンポジウムでは「下咽頭・頸部食道癌の治療戦略」、「GERD診療の up-to-date」、「気道領域における最新の話題」、「下咽頭・食道領域の内視鏡診断と最新治療」という内容で、いずれも興味深い内容でした。特に印象に残ったのは特別講演で現在アフリカのスーダンで地域医療に従事されている川原尚行先生の話でした。もともと外科医として外務省の管轄で海外派遣されていたものの、地域に根ざした医療を目指して外務省を辞め、一人の医師としてボランティアと協力しながらスーダンの医療活動に従事しているというものでした。

群馬での観光や美味しいものは堪能できませんでしたが、充実した学会で、自分の今後の将来についても考えさせられた学会でもありました。

第57回日本アレルギー学会秋季学術大会

大 堀 純一郎

本学会は11月1日から3日まで横浜で開催された。当科からは、黒野教授、松根准教授、宮ノ原先生、私大堀の4人が参加した。今回は私が、アレルギー性鼻炎における VEGF と TGF- β 1 の役割について、宮ノ原先生は使用実態調査からみた花粉症に対する第二世代抗イスタミン薬の選択基準の検討について、松根准教授は好酸球性副鼻腔炎の鼻茸由来培養線維芽細胞にたいする EM900 の作用について、黒野教授は、小児アレルギー性鼻炎の治療における留意点についてセミナーを行った。

本学会では、one airway, one disease の視点からの上下気道疾患の異同というシンポジウムが開かれた。このセッションでは、喘息、アスピリン喘息、副鼻腔気管支症候群等について耳鼻科医の視点、呼吸器内科の視点からのディスカッションが行われていた。特に、アスピリン喘息ではほぼ100%に鼻茸を合併しており、鼻茸を手術にて除去することにより喘息発作の回数がへり、さらに術前後にて尿中のロイコトリエン濃度が有意に低下するということからアスピリン喘息においては上気道の治療が重要であるとのコンセンサスを得ていた。呼吸器内科の立場からも気道という点において、上気道の治療が注目されて来ていることを実感した。しかしながら、好酸球性副鼻腔炎についての詳細な病態解明、治療については未だ確立されたものはなく、呼吸器内科からもこれらの病態についての解明を熟望されていた。当科では、好酸球性副鼻腔炎に注目し研究を行っておりこれらの研究が急務であると自覚し、非常に刺激となった学会であった。

第26回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

田中紀充

平成20年2月21日から23日にわたって、大阪にて開催された。今回は、一般演題1題のみの発表で、幾分か寂しい感は否めなかった。「舌下投与による Phosphorylcholine 特異的粘膜免疫応答」の演題で、早水先生、宮下先生と現在行っている実験の結果を発表させて頂いた。プログラムとしては、ヒスタミン受容体の教育講演、遺伝子解析によるアレルギー疾患の病態解析、審良教授による自然免疫とウイルス感染についての講演があり興味深かった。

しかし、何をおいても今回報告しておかなければいけないのは、黒野祐一教授の理事長就任が総会にて承認、発表されたことではないでしょうか。理事長のお膝元として、しっかりとした研究を継続して、学会で発表できるよう努めたいと考えております。



日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会
新理事長就任挨拶
第26回学会総会にて（H20.2.22）

9th International Symposium on Recent Advances in Otitis Media

June 3-7, 2007 (Florida USA)

田中 紀充

2007年6月3日から7日まで、フロリダで開催された中耳炎シンポジウムに参加した。会場ホテルは、ビーチに隣接しており、リゾート気分を満喫した学会であった。アメリカ留学帰りの福岩先生の案内で、アメリカンスタイルの食事を満喫し、スペースシャトル打ち上げを体感でき、貴重な体験であった。

学会のほうは、教授が参加した学会終了後のミーティングで、中耳炎予防ワクチンの抗原の候補の一つに phosphorylcholine が加えられたとのことであった。さらに、みんなで上気道感染予防粘膜ワクチン開発へむけて、実験データの積み上げをしていきましょう。



OM2007 in Florida

3. 関連病院便り

国立病院機構 鹿児島医療センター便り

高 木 実

皆様、いかがお過ごしでしょうか？ 平成19年8月より鹿児島医療センターに勤務している高木です。ここ鹿児島医療センターは鹿児島全土からの耳鼻咽喉科だけでなく、その他様々な診療科からの先生方から紹介された多くの患者様のために、外来診療、入院治療に当たらせて頂いております。癌拠点病院を掲げるだけあって、頭頸部癌を中心に、その他耳鼻咽喉科全般の疾患、緩和ケアなど様々であり、毎日勉強しがいがあります。また再建手術のような手術の際には鹿児島大学病院から応援に来て頂いております。ここ鹿児島医療センターが現在のような医療ができるのは鹿児島大学だけではなく、紹介して頂いた先生方のおかげであると思っております。

最後に鹿児島の耳鼻咽喉科医療のため松崎先生を筆頭に粉骨砕身頑張っていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願いします。

鹿児島県立大島病院

永 野 広 海

1) 奄美諸島の概要

奄美諸島は、鹿児島市の南西約370～560kmの範囲に位置する。奄美大島、喜界島、加計呂間島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島の有人8島から形成されている。そのなかでも最大の奄美大島は712km²で沖縄本島、佐渡島に次ぐ大きさである。

奄美諸島の総人口は平成17年時点において126,439人、奄美本島の総人口は70,462人、中心都市の奄美市（旧名瀬市、笠利町、住用村）の人口は48,936人である。

2) 奄美諸島の耳鼻咽喉科診療体制の状況（2007年11月現在）

奄美諸島において、常勤の耳鼻咽喉科・頭頸部外科医は、当院の2名、奄美市内の開業医2名、徳之島の総合病院の1名で合計5名である。また黒野教授に、1年の2～3回の頻度で手術の指導に来て頂いている。

大山勝名誉教授が1ヶ月に2回の頻度で奄美市内の医師会病院に、診療に行かれている。しかし入院、手術、救急対応を行っている施設は当院のみである。

3) 当科の外来診療の状況

当科は、月曜日から金曜日まで午前中のみ外来診療を行っている。一日の外来患者数は平均約40人である。疾患は、アレルギー性鼻炎、滲出性中耳炎、副鼻腔炎、扁桃炎などの通常疾患から頭頸部領域の悪性腫瘍まで多岐にわたる。

受診患者は、奄美本島はもちろん、遠方では喜界島、沖永良部島、徳之島からも航空機や定期船で来られる。特に沖永良部島、徳之島から定期船で来られる場合は、定期船の時間の関係上、奄美市内の一泊しなければならない。その様な離島の事情から完全予約制とはしていない。

2000年から2006年までの外来患者の推移を示す（表1）。

4) 当科の入院疾患の状況

2006年1月から2007年10月までの22ヶ月の入院患者数は、累計608名（2006年の1年間では累計307名）である。疾患別では、喉頭癌や咽頭癌などの腫瘍性疾患が最も多く、次は慢性副鼻腔炎や肥厚性鼻炎などの手術目的の鼻疾患である（表2）。

腫瘍性疾患は、精査のための入院、治療のための入院など一人の患者が複数回入院したため最も多くなったものと考えた。

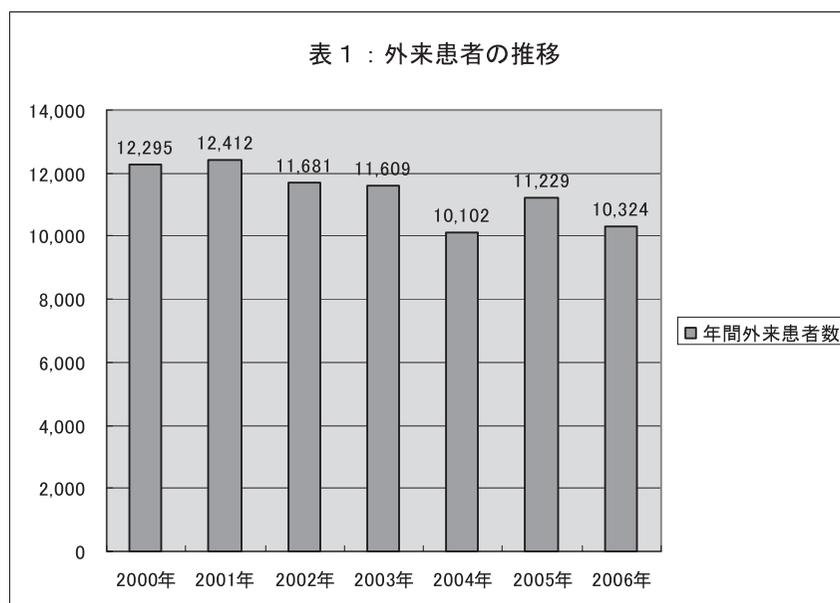


表1：2000年から2006年までの外来患者の推移

表 2 : 入院疾患

	2006年度	2007年(10ヶ月間)
急性慢性副鼻腔炎, 他鼻手術疾患	50	71
めまい	28	14
鼻出血	16	17
急性, 慢性扁桃炎	31	25
急性, 慢性中耳炎, 他耳手術疾患	19	19
突発性難聴	17	12
顔面神経麻痺	12	8
扁桃周囲膿瘍, 他膿瘍疾患	9	13
急性喉頭蓋炎	4	7
咽頭癌(上～下)	33	21
喉頭癌	22	12
甲状腺, その他唾液腺(良性を含む)	10	22
舌癌	6	4
その他悪性腫瘍	3	4
顔面外傷	6	18
その他	41	31
合計	307	298

表 3 : 年間手術件数

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年
鼓室形成術	14	6	22	13	20	10	14
チューブ留置術	6	3	10	10	8	3	6
耳瘻孔摘出術	1	5	4	0	3	1	1
鼻茸切除	1	5	0	1	4	0	0
鼻中隔矯正術	7	2	2	5	8	6	32
両側粘膜下鼻甲介手術	3	0	2	11	8	18	28
上顎洞篩骨洞根本術	5	12	10	13	21	19	54
術後性上顎洞のう胞手術	1	1	2	5	4	3	0
鼻腔腫瘍手術	0	0	1	9	3	0	1
口腔内良性腫瘍手術	0	1	2	1	0	1	0
口腔内悪性腫瘍手術	1	3	6	5	1	4	3
扁桃摘出術	29	18	36	28	31	32	28
アデノイド切除術	2	5	1	3	6	2	3
喉頭微細手術	2	2	4	10	6	5	5
喉頭直達鏡検査	11	20	10	1	10	10	25
食道鏡検査	3	7	10	9	11	12	13
咽頭腫瘍手術	1	2	5	2	1	4	1
喉頭摘出	0	1	1	1	0	0	2
耳下腺手術	1	4	7	6	3	3	2
顎下腺手術	1	2	3	1	0	1	3
甲状腺腫瘍術	3	2	8	3	3	4	8
頸部感染症手術	0	1	2	1	0	0	0
気管切開術	2	2	15	3	7	13	7
その他	12	20	57	44	49	35	33
合計	109	126	209	184	207	180	270
症例数	101	101	187	161	180	151	199

5) 当科の手術症例の検討

手術は、月曜日から金曜日の午後に行っている。2000年1月から2006年12月までの7年間の手術件数は、1,285件で、疾患の内訳は(表3)のようである。ほとんどが待機症例であるが、急性喉頭蓋炎、扁桃周囲膿瘍、咽後膿瘍、喉頭悪性腫瘍にともなう緊急気管切開も53件ある。

6) 頭頸部領域の腫瘍疾患の検討

2006年1月から2007年10月までの22ヶ月間に、当科を受診した耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の悪性腫瘍性疾患は、部位別に上咽頭2例(T3:1例, T4:1例), 中咽頭11例(T1:1例, T2:2例, T3:2例, T4:6例), 下咽頭14例(T1:4例, T2:4例, T3:2例, T4:4例), 舌口腔8例(T1:4例, T4:4例), 喉頭18例(T1:9例, T2:5例, T3:1例, T4:3例), 甲状腺4例(T1:4例), 唾液腺2例(T1:1例, T4:1例), 鼻副鼻腔3例(T1:1例, T4:2例), 原発不明癌の頸部リンパ節転移症例が2例あった(表4)。

上記のように進行例が多く、受診時にすでに手術の時期を逸している症例も多い。そのような進行症例や手術を希望されない症例に対して、TPF療法【Docetaxel 50mg/m²/day(Day1), Cisplatin 60mg/m²/day(Day4), 5-FU 600mg/m²/day(Days1-5)】と放射線併用療法を積極的に選択している。

7) 特殊外来

1. 耳鳴りを中心とした漢方外来(1ヶ月に1回)

器質的疾患のはっきりしない耳鳴り患者に対して、漢方薬を中心に取り組んでいる。

2. 慢性中耳炎外来(不定期)

慢性中耳炎は耳漏を繰り返し、治療に難渋する。当科では、2006年よりブロー液(13%酢酸ナトリウム)を積極的に用い、良好な結果を得ている。

3. 咽喉頭異常感症外来(不定期)

鼻腔、咽頭、喉頭に異常所見が認められないにもかかわらず、咽頭のひっかかり感や違和感を訴えて、耳鼻咽喉科・頭頸部外科を受診する患者は多い。その咽喉頭異常感症患者に対して、当科では積極的に上部消化管内視鏡検査を行い食道疾患の検索を行っている。

内視鏡検査において異常所見の認められない症例は、漢方薬を中心に取り組んでいる。

4. 小児難聴外来(1週間に1回)

先天性難聴疾患の早期発見のため、積極的にABR検査を施行している。

5. 補聴器外来（1週間に1回）

高齢者の感音性難聴に対して補聴器外来を行っている。

8) その他当科の活動

1. 奄美市内の小中学校の学校健診（1年に1回）を行っている。

2. 瀬戸内町、請島、与路島、喜界島へ、他科（皮膚科、眼科、神経内科）との合同地域巡回診療（1年に1回）を行っている。

3. 喜界町立診療所への巡回診療（1ヵ月に1回を行っている）。

4. 奄美市内のハンセン病療養施設への巡回診療（1ヵ月に1回）を行っている。

以上の院外での診療活動も行っている。

これからも微力ながら地域医療のため頑張りますので、宜しくお願いします。同門の先輩方、地方部会の先生方には今後ともいろいろと御迷惑をかける点があること存じますが、御指導御鞭撻の程宜しくお願い致します。

鹿児島市立病院便り

下 麥 哲 也

早いもので、昨年に鹿児島市立病院便りを書いてから、1年が経ちました。

今年も下麥が報告させていただきます。

2007年度、鹿児島市立病院は二人の頼もしい新人を迎えることができました。

今回は、その二人の紹介を中心に、報告させていただきます。

新人一人目は、直野（なおの）秀和先生。

2007年5月から、前任の小松原先生に代わって、宮崎大学から赴任された男性医師です。顔が、往年のTVドラマ「Xファイル」のモルダー捜査官に少し似ています。「午前中は怖い顔で仕事してますね」と看護師さんからいわれたそうですが、ご本人は「午前中は眠いからですヨ」と答えておられました。最近では鹿児島でのゴルフにも満喫されているようです。皆さんよろしくお願ひします。

新人二人目は、永田圭先生。

指宿市、永田耳鼻咽喉科の息子さんで、新制度研修医として市立病院に赴任されました。180cmを超える長身の先生で、耳鼻科みんなで、ICUに回診にいったときは、「みんな背の高い先生で怖いねえ」といわれました。お父上の薫陶を受けてか、欧州文化の知識に長けていて、特にワインを語らせると、話題に事欠きません。

永田先生の、市立病院研修は2007年度で、終了とのことでしたが、またあえるのを楽

しみにしています。

市立病院は移転，新築が決まり，新病院の設計や構想もちらほらと耳に入るようになってきました。しかしながら，現地（たばこ産業跡地）は2007年12月現在では，更地のままです。一体いつ完成するのかなどと，考えつつ，今年度の報告を終わらせていただきます。

藤元早鈴病院便り

森 園 健 介

皆さん，いかがお過ごしでしょうか。

とりあえずこの1年間は全国的に宮崎ブームであったように思いますが，それもすべて某知事のがんばりによるところによるものかと思えます。元タレントということでテレビ等への露出も多いわけですが，知名度にあぐらをかかず，真摯に県政に取り組む姿勢があつた高い支持率につながっているんだろうと素直に感心させられます。とりあえず僕も，宮崎県知事の名前が記された麻薬使用者免許証のコピーをいつか見せびらかそうと大事に取っていたりしています。全国的な知名度をぐっと上げた宮崎に，鹿児島が篤姫効果でどれだけ盛り返せるかが最近気になるところです。

最近の藤元早鈴病院での変化について書きたいと思えます。以前からこの病院には食堂が無く，職員は各部署のスペース等で食事を取っておりました。しかし職員の福利厚生のためにはこれではいかんということで，このたび職員食堂が設置されました。ただ，以前の病院便りで書いた総合医局の場所を改装して作ったものであるため，食堂と言ってもその場で調理をしているものではなく，あくまで昼食をとるスペースが開設された，という程度のものでありますが…。とはいえ弁当屋さんが弁当の販売に来ていたり，自動販売機が設置してあったり，設備は充実していますし，また内装もテーブルには季節の花が飾ってあったり，クリスマスシーズンには室内の飾り付けがしてあったりして居心地の良い空間にはなっています。今は事務方が主に利用されているようですが，職員全体の交流の場として今後期待されると思います。（ちなみに総合医局は別の場所に移転になりました）

それからやや遅ればせながらと言った感はありますが，院内にAEDが設置されました。外来では1階外来，2階外来のロビーに1個ずつということで2ヶ所のみ設置となっています。診療科の内容から高齢者が比較的多い病院ですので，もう少し設置箇所が多くても良さそうな気もすると思うのですが，ただ幸いにもまだそれを使用するに至った現場を見ることも無く過ごしておりますので，案外とそんなものなのかもしれ

ません。

病院全体での大きな変化もあまりなく、適当な内容でお茶を濁してしまいましたが、それだけ今の激動の医療情勢の中でも比較的平穩を保っているとも言えるのではないかと勝手に都合のいい解釈をしております。それも各診療科の先生方及びスタッフのたゆまぬ努力によるところかと思えます。

病院に対しても力になればとは思いますが、やはり僕自身は力不足であり、黒野教授をはじめとする大学の先生方や開業の先生方のお助けをいただきながら、何とか日々の診療をこなしているような状態です。各所に御迷惑をおかけしておりますが、どうかこれからも皆さんの御指導を宜しくお願い致します。

済生会川内病院便り

上 村 隆 雄

今年度の済生会川内病院の最大のニュースは、病院長の交代である。前院長が諸事情で院長職を辞められ、後任に副院長であった内科の青崎先生が病院長となり、産婦人科の比良先生、放射線科の小野原先生、腎臓内科の濱田先生がそれぞれ副院長に就任された。青崎先生は地元川内の出身で、平成2年からここ済生会病院に勤務されている、いわゆるたたき上げの医者で、患者さんはもとより職員からも絶大なる信頼を得ている先生である。上層部が変わったことで、新しい風が吹き、よい方向へ行くことを期待している。その中の改革の一つとして、平成19年秋、がん医療委員会が立ち上がり、がん緩和医療チームも発足した。なにかの縁で小生もメンバーの一人に指名された。

3年前NHKの番組でがん医療のドキュメンタリーおよび討論会があり、地方のがん診療拠点病院の不足やがん難民のことを知り衝撃を受けた。「自分たちの暮らしているこの地も全くその通りではないのか・・・?」。番組後のある日の病院医局会で、がん難民のことや、地域におけるがん治療、とくに緩和ケアやホスピスの必要性について意見したことがあった。実は自分自身、研修医時代、緩和ケアやホスピスに多少興味があった。ホスピスのパイオニア的存在であった浜松の聖隷三ヶ原病院が隣県にあり、多少情報は入ってはきた。しかし、すぐ近くに愛知県がんセンターがあり、頭頸部外科やがん治療は上司からの指導や指示ですませていた。また大学院の研究テーマが聴覚電気生理だったこともあり、実際研修したり、専門的に勉強したりすることはなかった。あれから約20年たった今、地域の病院の耳鼻咽喉科一人部長として多くの野頭頸部がんの方の最期を看取り、緩和ケアチームのメンバーとしてがん患者の治療を行うとは全く想像していなかったことである。番組が放送された当時（平成16年）、がん診療拠点病院は全

国に135施設で、拠点病院のない都道府県が7つ（秋田・山梨・長野・京都・兵庫・広島・鹿児島）あり、我が鹿児島県もその1つであった。その後、鹿児島大学病院、鹿児島医療センター、平成19年には県立薩南病院と県立大島病院がようやく承認された。ここ済生会病院は、放射線治療施設があり、多くのがん患者が治療され、同時に緩和ケアのための放射線治療も行っている。放射線科の小野原先生もがん治療、特に緩和ケアについて以前から行ってこられたそうである。あの小生の医局会の話に賛同してくださり、今回の副院長就任を機に、がん拠点病院準備委員会、緩和ケアチームを立ち上げられ、現在地域がん診療拠点病院へ申請、平成20年春に認可された。

地域医療、とくに高齢者にとって、がん医療を含め地域完結型医療が理想である。地方の勤務医不足、マンパワー不足は早期に改善願いたいのであるが、今できることをやれば大半は何とか乗り越えられる問題であろう。医療格差が問題視されているが、日本の医療施設、検査を含めた医療器具等ハード面は、どんな地方にいても比較的充実しており、世界的にみてもトップクラスである。行政、医師会、医療を取り巻く多種多様な業界、それぞれの立場、言い分はあろうが、誰のための医療なのかを今一度考えてほしいものである。医学部入学時に宣誓したヒポクラテスの誓いをもう一度読み返し、「どげんかせんといかん」と心の中で思いつつ、地域の人たちが安心して医療をうけられる世の中になればと願う今日この頃である。

鹿児島生協病院便り 第三報

積山幸祐

2005年4月1日に生協病院に赴任して早くも4年目に突入しました。相変わらず外来患者、特に予約外や手のかかる患者が多く、救急外来経由の眩暈患者や鼻出血も多く日常業務をこなすことで手一杯でなかなか思うようにはいきません。なんとかモチベーションを保ちながら目標をもってがんばっていきたいと思います。

2006年6月から着工した病院のリニューアル工事ですが、2007年10月に第I期が終了しました。このリニューアルに伴い2階に療養病床を19床開設し、鹿児島生協病院の病床数は226床から245床となりました。「差額料金」なしの個室は25床から35床になり、狭い6人部屋がなくなり ゆっくりの4人部屋や2人部屋が増えました。さらに手術室が一部屋増え、「集中治療病床」も8床造られました。鼻出血や耳出血でICUに呼ばれることも多くなりました。病院としては鹿児島市南部の拠点として300床化を目指しているようです。しかし耳鼻科外来は何も変わっていません。医局も駐車場に立てられたプレハブ小屋のままです。

総合病院として手術を中心にしたいのですが、一人でできることは限られており手術枠も、週2単位（火 木の午前中のみ）でなかなか手術数は増えません。しかし、通常疾患であれば比較的早く手術にもって行くことができ、時間外手術も可能ですのでご紹介よろしくお願ひ致します。最後に07年4月から08年3月までの手術室での手術症例を示します。

扁桃摘（アデノイド切除を含む）	40
UPPP	2
ESS	22
devi+sub.con.	4
鼻茸切除術	2
鼻腔腫瘍摘出術（ESS）	1
原発性前頭洞嚢胞開放術（ESS）	1
視神経管開放術（ESS）	1
眼窩壁骨折整復術（ESS）	1
鼻骨骨折整復術（全麻）	2
鼻前庭嚢胞摘出術	1
鼓膜形成術	5
鼓室形成術	2
鼓膜チューブ挿入術	4
先天性耳瘻管摘出術	1
甲状腺切除術	1
顎下腺摘出術	1
耳下腺切除術	3
正中頸嚢胞摘出術	2
下口唇粘液嚢胞摘出術	2
唾石摘出術	2
舌良性腫瘍摘出術	1
アテローム摘出術	2
喉頭蓋嚢胞摘出術	1
頸部膿瘍切開排膿術	1
頸部脂肪腫摘出術	1
術後出血止血術	1
リン摘	1
眉毛挙上術	1
計	109

天辰病院便り

原田 みずえ

H18年11月～H20年3月までの1年4ヶ月という短い間でしたが、天辰病院およびあまたつクリニック（外来）に勤務させていただきました。前任の早水先生が1年間勤められましたので、私も1年間で交代だろうと思っていたのですが、昨年10月に世界初の経口カルバベネム系薬剤の治験（第Ⅲ相）をさせていただくことになり、治験が終わるまでということで、4ヶ月間任期が延びました。

赴任当初、一人で大丈夫だろうかとすごく不安でしたが、天辰院長はじめ、すばらしい看護師やスタッフに恵まれ、何とかやってこれました。また、鹿児島大学病院がすぐ近くにあり、困った時は相談できる先生方がたくさんおられたおかげで、心強くもありました。

天辰病院は、外科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科（ペインクリニック）よりなり、耳鼻科外来のみ、あまたつクリニックで行っておりました。これまで大学病院や県病院の勤務が長かったため、開業医の先生方の勤務医とはちがった苦労がわかりました。あまたつクリニックには、1日50人前後の患者がいらっしゃいますが、季節で波があり、夏はかなり少なくゆっくりできますが、1～3月はインフルエンザや花粉症の患者が特に多く、おかげで昨年は私自身インフルエンザにかかってしまい、昨年の2～3月はすごく疲れたのを覚えています。しかし今年は、インフルエンザも少なく、スギ花粉の飛散開始も昨年よりずいぶん遅かったようですし、患者様自身に尋ねても、ほとんどの方が、鼻・眼症状は昨年よりもずいぶん楽だとおっしゃっており、患者数も明らかに少なかったように思います。

そして、耳鼻科の入院患者は大体いつも5～6人いらっしゃいますが、突発性難聴や、急性扁桃炎、急性喉頭蓋炎といった急性疾患の患者が多く、その他、癌治療のため大学病院に放射線治療で通院される方や、化学療法をされる方もいらっしゃいますし、ターミナルケアで最期まで当院で看させていただく方もいらっしゃいます。ただ、ここ数年、麻酔器の不具合で、全く手術ができなかったため、大学病院や、市立病院、生協病院等へ依頼していたのですが、後任の谷本洋一郎先生からは、手術体制を整え、7月位から行う予定になっておりますので、がんばってもらいたいと思います。また、当院は、鹿児島大学病院に非常に近い位置にありますので、高気圧酸素療法や、放射線治療のため大学病院へ通院も可能ですし、いつでもCTもとれます。電話一本で、臨機応変に対応できるところが、この病院のすばらしいところです。開業医の先生方もどしどし、当院を利用していただけたらと思います。後任の谷本先生、がんばってください。

XI. 関連病院

(平成20年4月現在)

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30~11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	火・木 (8:30~17:00)	
県立大島病院	894-0015	名瀬市真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017	(休診中)	
県民健康プラザ 鹿屋医療センター	893-0013	鹿屋市札元1-8-8 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944	(休診中)	
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30~11:00)	月・水・金
済生会川内病院	895-0074	川内市原田町 2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797	月~土 (8:00~11:00) 月・金のみ(再診) (14:00~16:30) 水の午後 第1・第3 特殊検査 第2・第4 補聴器外来 (14:00~16:30)	火・木の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
鹿児島生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30~17:30) 水・土 (8:30~12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	火・土 (8:30~11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00~17:00) 火 (9:00~11:00)	火の午後
市比野記念病院	895-1203	薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715	火・木 (14:00~18:00) 土 (9:00~18:00)	
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・木・金 (9:00~18:00) 火 (14:00~18:00) 土 (9:00~13:00)	火の午前

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町 1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	火・木 (13:30~16:00) 土 (8:30~11:30)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	火・木 (8:30~11:30)	
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20)	
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30~15:30)	
指宿鮫島病院	891-0406	指宿市湯の浜1-11-29 TEL:0993-22-3079 FAX:0993-22-3019	月・火・木・金 (8:30~15:00) 土(8:30~12:00)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	第1・第3 金(8:00~16:00) 土(8:00~10:00)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	土 (9:30~15:00)	
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL:099-252-2228 FAX:099-252-2736	火・金 (8:30~17:00)	
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL:0997-26-1230	隔週木曜日 (8:30~16:00)	